

## 木 瓜

一九四

私の母の里は私の村から大きな尾根を越したところにあつた。私は幼い頃、よく母のお供をして、その尾根を越えて母の里に行つた。

二晩三晩泊つても母はなか／＼家に戻らうとしなかつた。すると、母の弟の、私には叔父さんが大變心配して、母を促し立て、その尾根の頂上まで送り出しては家に歸らせるのであつた。母は、青草の高く繁つた細い山路をのろ／＼と歩き乍ら、何か叔父さんと話しては、ほろ／＼と涙を溢したりした。さういふ母を見ると、私も何だか悲しく頼り無くなつて、わけも判らずに唯涙含まれたものだ。而して、私の涙にうるんだ眼には、叢の中に咲きこぼれた木瓜の花が紅い輪になつてくる／＼と舞ふやうに見えた。——その花の名が木瓜ぼけといふのである事は其の時分は知らなかつた。私達はそれをしどめの花と呼んでゐた。あの眞赤なしどめの花は、六つか七つかの、私に悲しい涙の味を教へて呉れた花だつた。

## 電車の切符

私の若い友達のA君は、病氣になつて北の方の郷里に歸つて了つた。歸つて見ると、病氣の外にも、家庭にまつはる面倒な事情があつて、もう迎も再度の上京は出来さうも無いといふのであつた。いろ／＼の夢とあこがれを抱いて出て來たA君の東京生活も、唯一年半で終りを告げてしまつたのである。

そのA君からこんな手紙が來た。

「……たしか、此方へ歸る前の晩、あなたをお尋ねした歸りに買つた切符の片道分です。これを、ふと外套のかくしの底から見つけ出した時、私の心は躍りました。今度東京へ出た時は、この片道分で、U停車場から直ぐあなたの處へ訪ねて行かう——と、それを樂みにして大事に／＼藏つておきました。が、もう再び上京の希望も失はれて了ひました。この切符も今はなか／＼に怨めしい形見です。破いて捨てようとも思ひましたが、貴方にお送り致しません。おひまの時、この切符でHさんの處へでも行つて、私の噂でもして下さいませ……。」

品

一九五

Hさんの妹のN子さん——あの美しい少女に、A君は密かに戀してゐたのだつた。

## 墨 痕

尋常四年生の時だつた。同級のTと私は非常に仲好しだつた。仲好しといふ以上に、私はTにある尊敬と、而して愛慕に似た感情をもつてゐた。

その時代の少年の何人でもものやうに、私はその時分善行の夢をみて居た。「少國民」か何かで讀んだ西洋の物語の中の、友人の身代りになつて獄に入り、友人の身代りになつて死刑を受けようとした人の話に非常に感激した私は、どうかしてさういふ事をして見る機會を得度いと冀つた。併し、さういふ善行の對象はどうしてもTでなければならぬと考へたのであつた。

ところがその機會が來た。丁度學期代りの時で、教室が改まると共に、私達は造りたての白木の香の鮮かな机を渡された。而して、疵を附けたり、墨で汚したりしてはならぬと嚴重に先生から申渡された。ところが、何人のよりも眞先に、私の机が大きな墨汁の滴りで汚さ

れて了つた。而して忽ち先生に見附けられて了つた。

それは、しかし私の粗忽では無かつた。確かにTがした事だと、私ははつきりとそれを見てゐたし、T自身も、それを知つて居た。が、私は、「此處だ！」と思つた。而して從容としてそれを自分の過として引受けた。その爲めに私は火の出るやうなお眼玉を先生から頂戴しなければならなかつた。——が、私は先生から叱られながらも、今にTが、「先生、それは私がしたのです。Kさんぢやありません。」と名乗つて來るだらうと思つてゐた。丁度その物語の友人の一人が、汗馬を飛ばして刑場へ駈け附けて自分の身代りになつて死刑にならうとする友人を救ひ出したやうに。而してその二人の友情が判官を動かして死刑になつた友人もその死刑を赦免されたやうに、私とTとの友情が先生を動かして、私は勿論、Tもその罪から許されるだらうと。

が、Tは私が待設けたやうに名乗つて出ては呉れなかつた。Tは飽迄知らん顔をしてゐた。私は自分の犯しもせぬ過の爲めにひどく叱られただけだつた。——その腹立たしさは長い間私の心に残つて居た。腹立たしさが消えて了つても、或る一つのしみが何時迄も私の心に痕をとめてゐた。丁度、白木の机の上に沁み込んだ墨の痕のやうに。——而して、その机もやがていろ／＼のしみや手垢で鼠色に汚れて了つたやうに、私の心も今ではだゞ黒く染まつて

了つたのだ。さうだ、悲しい事にはだ、黒く染まつて了つたのだ。

## 樹 栽 地

小學校の卒業記念に、その爲めに特に設けられた山の樹栽地に卒業生が杉苗を植ゑ附けるのが例になつてゐた。卒業式の翌日、私達三四十人の卒業生は、先生達と一緒に杉苗を積んだ車を曳つ張つて、山の樹栽地に出かけて行つた。

雑木林の奥に惚々と小鳥が啼いて、山櫻の花びらが何處からとも無く舞うて來る様な長閑な春の日であつた。溪流に添うた小徑をその樹栽地の方に辿りながら、私達は平常から仲の好かつた者同志に三々五々と分れて、いろ／＼と話しながら歩いた。

これから世の中に出て行くのだ——といふ心の勇みも、動もすれば胸を襲うて來る離愁に裏切られて、話はいつの間にかしめやかな調子になるのであつた。

谷底から山の中腹にかけてその樹栽地の、石ころ交りの土を掘り起しては、私達は一心に杉の苗木を植ゑた。

「ねえ。こゝに一つ君と僕とで並べて栽ゑとかうよ。君のは僕が栽ゑるよ。僕のは君が栽ゑて呉れ。」

「あゝ、さうしよう。」

私と、一番仲好しのAとは、互に將來を祝福し合ひながら、特別念入りに一本宛の苗を栽ゑたのであつた。あの二本の杉苗は無事に育つて居るだらうか。Aは今朝鮮の方に居る筈だが、ずつと前から音信不通になつて居る。

## 麥 笛

私は淋しい少年であつた。小學校に通ひ出してからもいつも孤獨で、學校への往復にも大抵一人でぽつ／＼と歩いてゐた。

廣い野の中の一筋の途に、眞晝の日は明るくさし渡つてゐた。その日の光のあまりに明るい丈、私の心は頼り無く淋しかつた、私は、漸く穂の出かゝつた麥の莖を路傍の畑から抜いて、麥笛を拵へてブーブーと吹き鳴らしながら歩いた。——あの頃は、それで——あの一莖

の麥の笛で、結構紛らし忘れる事の出来る寂しさであつた。

1100

## 毬

十五の春、私はY市に出た。

朝早く家を來て十里餘の道を歩いて、漸くY市についた時は、もうすつかり日が暮れて、始めて觀る都會の夜は、華やかな燈と賑かな人通りとで、私の疲れた頭をぼろとさせた。

あてにして訪ねて行つた人が丁度留守だつたので、私はとある宿屋へ泊つた。私が家を離れて第一の夜を過した宿屋が、Y市の何の邊であつたか、今では薩張思ひ出せたい。唯、心細い心持で、不案内の町から町へとさまよひ歩いた末、行き當りばつたりとその宿屋で草鞋を脱いだのであつた。

「まあ、書生さん、お伴さんは無いのですか？」などと、女中が不思議さうに聞いたりなどした。私は、妙に不安な、物かなしい氣がしてその夜は一晩中眠れなかつた。

その翌日は生憎雨だつた。朝飯の出来るのを待つ間、私は窓によりかゝつて、見知らぬ町

に降る雨を見乍ら、これから訪ねて行く知人や、その知人の紹介で書生に置いて貰ふ家の事などを想ひ描いて、涙含ましい程心細い氣がした。昨日の朝別れて來たばかりの父や母や弟妹やが、もう三年も前に別れた人のやうに懐かしく、早くもやるせない郷愁に胸を締めつけられた。而して貧しい家に生れた身の、不相應な望みなどは捨てゝしまつて、いつこのまゝ故郷に歸つて、そこで呑氣に暮した方がいゝか知ら？ などゝ、心弱く思ひ返されたりするのであつた。

その時、ふと私の耳に、女の兒の歌つてゐる毬唄が聞えて來た。振返つて見ると、今私が凭りかゝつて外を眺めてゐる窓と直角に對したところにも一つの窓があつて、その窓は、土藏造りの隣の家の二階の窓と手が届くほどの距離に接近してゐて、而して、その隣の二階の窓際で、その娘達であらう、十二三位と九つ位との姉妹が、餘念なく毬をついてゐるのであつた。

「ひい、ふう、みい、よう、よもの景色を、春と眺めて——。」

何でもそんな風の唄を清らげな聲で歌ひ連れながら、とん／＼と毬をついてゐるのであつた。兩方とも袂の長い色どりの濃かな着物を着て、而して兩方とも美しい娘である。而して、それが、丁度四角い窓でしきられて、一幅の繪のやうに見えるのであつた。

「私は、その美しい光景に一寸の開心を吸ひ取られて、ぼんやりとその方を眺めてゐたが、どうした拍子か、その毬がぼんと飛んで私の室の窓の中に轉がり込んだ。」

「あら、どうしよう？」

「あら、困つたわねえ。」と二人は、窓により重なつて此方を覗き込むやうにしたが、私が居るのに気がつくつと、

「書生さん。すみませんが、その毬をちよいと此方に投げて下さいな。」と姉娘の方が、その黒い眼を見張るやうにして、口元に笑を含みながら馴々しく私を呼びかけた。

私は、一寸どぎまぎとしながら、その毬を拾つて、黙つて向うの窓の中に投げ入れた。

「有りがたう？ ほんとに有りがたう？」と、二人の姉妹は聲を合せて禮を云つた。私は顔を赤くして、微笑を返した。

その二人の姉妹の顔が、どうした事か、私の心には、丁度初戀の人の顔のやうにはつきりと彫み込まれて居る。

# 處女の死 (九年五月)

姉は二十の夏に死んだ。その時私は十五だつた。五つちがひの姉と私とは、姉一人弟一人、唯二人きりの兄弟だつた。私は大へん内氣な性分で、外へ出て友を求めぬ事をしなかつたので、小さい時から姉とばかり親しんで居た。

村の小學校へ上つてからも、私はほかの仲間にはまじらずに、始終姉のあとについて往復した。高等科の方は大抵一時間宛時間が多かつたので、私は、いつも、姉の教場の窓の下でその歸りを待ち合はせた。櫻の樹の樹脂を採つたり、地面にらくがきをしたり、板壁に凭りかゝつて今日教へられた讀本を口の中で誦讀したり、いろ／＼にしてみても、どうも待遠しくて堪らないので、そつと窓闕に手をかけてせいびをして覗き込むと、此方から二側目の、うしろから三番目の机に坐つてゐる姉は、一寸私の方を向いてにつこりと笑つて、

「もう少し。もう少し。」といふやうに眠くばせをするのだつた。はじめの二三度は、さうして返事をして呉れるが、しまひには、一心に黒板の方を見詰めてゐて、些とも此方を見て呉れないので、私は妙に腹立たしいやうなまだ／＼とした氣持になつた。それに、誰も居ない廣い校庭に薄い日の光が、いんとさしわたつて、彼處此處に捨てられた白い紙屑が時々思ひ出した様にかさこそと轉つたりしてゐるのを見ると、何となく心細くもなつて來るので、それを紛らさうと小聲で唱歌を繰返してゐるうち、どうかすると思ひ切り大きな聲で歌ひ出し

て、自分で自分の聲にびつくりして慌て、止めることもあつた。すると、教室の中からどつと笑ひ聲が起つて、先生のやさしい笑ひ顔が窓から現はれて、

「やあ、お待遠う、もう少しですよ。」と、云ふのだつた。私は眞赤になつて逃げ出したが、そんな時、私はあとでうんと姉に怒られた。

「順三さんはいや！ あんな大きな聲を出したりして。それにあんなに度々覗いちや駄目よ。明日ツから、もう先にお歸り！」姉は、こんな風に私を叱るのであつた。

その時分は、高等科へ通ふ女の子は村でも幾人も無く、私の部落では姉がたつた一人あるだけだつた。で、姉にも別に伴が無かつたから、私達はいつも二人きりで、十町の上もある遠い途を往復してゐた。歩きながら、姉はよくお伽噺をしてきかせて呉れた。姉は本を讀む事が好きで、その教科書包みには、屹度二三冊の少女雜誌などが入つてゐた。而して姉は少女らしい空想と憧憬とを以てその中のいろ／＼の物語を私に話して呉れるのであつた。

學校の門を出てだら／＼とした坂を下りて町の一角を通りぬけて、小さな橋を渡ると、あとは、すつと淋しい野道が続いてゐた。その野道にかゝると、

「さあ、今朝の續きを話してくれ！」と、私は姉にせがむのであつた。

「何處まで話したつけ。——さう／＼、瑠璃姫が鷲に攫はれたところまでだつた。これから

が面白いんだよ。」こんな風に姉は話しはじめるのだつた。姉はどちらかと言へば無口の方だつたが、さういふ話をするとなか／＼うまかつた。私は話の面白さに、道の盡きるのも忘れて歩いた。

野邊の中ほどの所の路傍に、小高い塚があつて、大きなうろを有つた古い榎があつて、榎の下に小さな石地藏が一つ立つてゐた。私達は、時とするとそのお地藏さんの前の芝生の上で、日の暮れかゝるのも知らずに話しこむことがあつた。

今も斯うして眼を瞑れば、その光景が繪のやうに浮んで來るのだ——。榎の梢には紗を張つたやうな淺緑の嫩葉わかばが夕日に明るんで、その中で小鳥が連りに囀つてゐる。その根方の芝生には二人の小さい姉と弟とが居る。姉は紫の前掛の上に本をひろげて熱心に語り續ける。弟はその前に長々と寝そべつて頰杖をついて、姉の口元をまじろぎもせずに見詰めながら、同じやうに熱心にその話を聽いてゐる。姉は時々、その空想に酔つたうつとりとした瞳をあげる。見渡す野は、靜かに暮れて行つて、向うの國境の連山に沈んで行かうとする日が、仄かにその山頂の残雪をきらめかせながら、美しい夕焼を空に染め出してゐる——。

二人は、時々喧嘩をした。喧嘩をして、どつちか一人泣きながら、五六間位あとさきになつて歩いて歸る事もたまにはあつた。しかし、大體に於てする分仲の好い姉弟には違ひ無かつた。

私が、往きにも復かへりにも始終姉のあとにばかりくつついてゐるといふので、男の子達は、女みたやうだの、意氣地無しだのと云つて、からかつたり悪口を云つたりした。それに、上級の女の生徒だといふと、何がなし、苛めつけてやらすには措けないといふ妙な癖を有つてゐる彼等腕白どもは、姉には殊にいろいろのいたづらをしかけたり悪態あくたいをついたりした。が、姉は飽迄も平氣で、お前達などは相手にしてやらない、といふ風で、傲然と彼等の前を歩いて行つた。

「お辭儀をしなければ通せ無えぞ。」「さあ、俺の股を潜つて通れ！」などとくちん／＼に喚わめいて、大勢が道の真中に立塞がつて通せんぼうをする事などがよくあつたが、そんな時、姉は、一寸眉をひそめた丈で何も云はずに、たれでも前に立つてゐるものを押しのけるやうにして、ずうツと通り抜けて行つた。あまりしつツこくされると、

「何をするの？ お前達。」などと威丈高な調子で叱りつけたが、流石の腕白共もそれに氣を吞まれてたじ／＼となつて了ふといふ風だつた。ほんたうに勝氣な姉だつた。而して、高慢といつてもいゝほどの此の強い誇り——これは恐らく、田舎の血統の舊い家に生れた私達一家族に通有のものであつた。私自身も私の父も私の祖父も、皆これをもつてゐた。が、中でも姉は最も多量に此の感情を所有してゐたやうだつた。

私の家は、村でも舊い家柄の家であつた、而してまたかなりの地所持だつたので、村でも一だん上に置かれてかなり尊敬されてゐた。だが、丁度その時分——私が小學校へ通ひ始めた時分から、父が或る新事業を企て、失敗したのをきつかけに、急速度で家運が傾いて来て、二三年のうちに地所もすつかり手離してしまひ、二三十人もゐた男女の雇人達も一人のこらず暇を出し、土藏や離屋はなれは勿論、母屋まで賣拂つて、一家が隠居所ひっそくに逼塞するといふ様な状態になつて了つたのだつた。長い間一時凌ぎのとりつくろひでごまかして來たのが、一どきに崩れて來たので、それは實際、夢では無いかと思はれるやうな激しい没落のしやうであつた。で、愈々どん底に落ちて、殆ど其日暮らしにも等しいみじめな暮向くらしむきになつて了つたので、その春小學校を一年のこしてK市の女學校へ行つてゐた姉も、未だ入學して半年も経たないのに呼び戻されて了つた。而して、妙に憂鬱に氣むづかしくなつてゐる父と、すつかり氣が弱くなつてしつきりなしに愚痴ばかりこぼしてゐるやうな母と、それから私と姉とのたつた四人だけのひそやかな、濕つぽい陰氣な生活がはじめられた。——祖父は、一年ばかり前に亡くなつた。その前から大分老耄れて了つて、眼や耳も不自由になつてゐた祖父は、矢張村一番の大旦那のつもりで、豊かに安らかに死んで行つた。祖父が生きてゐるうちは、

せめて母屋だけはその儘にして置き度いといふ父の苦心も無駄になつて、取り崩す槌の音が、隠居所に寝てゐる祖父の枕もとまで響いて來ると、祖父もどうやら氣がついたと見えて、「どうして家を壊すのだ。」と訊ねた。

「おぢいさん。すつかり新しく建て直すのです。古くなつて棲みにくくなりましたからね。前よりすつと大きなのに。」と、父がわざと元氣よく答へると、祖父は、

「ふうむ。」と云つて、一寸考へるやうな風をしたが、

「さうか、さうか。」とうなづいた。それから間もなく死んで了つた。

「老人はまあいゝ。死んで行く者はまあいゝとしても——是からといふお前達がなあ。」と、父は私達二人を見て、涙ぐんで嘆息したが、實際、丁度芽ばえようとする時に、冬に逢つた二本の草の様な私達二人であつた。だが、私の方は未だ何事もよくわからない子供だつた。坊ちやん坊ちやんと囃して呉れる雇人達が皆去つて了つたり、家や土藏が無くなつたり、物が乏しくなつたり、皆が暗い顔をし家の中が妙にしめつぽくなつたりするのを見ると、それは悲しく無い事は無かつたけれど、しかし、それ等の不幸の本當の苦にがさを味ふには、私の心は未だ餘りに幼なかつた。

私の方はさうだつたが、一番物に感じ易い年頃になつた姉にとつて、斯ういふ運命のいか



につらいものであつたかは、今考へて見ても想像に餘りあるのだ。

未だ女學校にはひらない前、姉はいかに女學校に憧れてゐたか。その頃は未だ女學生といふ言葉が珍らしく響く時分ではあり、村の娘などで、女學校へはひる者は殆ど無かつた。女學校へ入り度いといふ望みが、幾日も幾晩も繰返された願ひによつて漸く許された時、姉はどんなに欣んだか。姉は女學生としての生活を様々に想ひ描いては、

「私ね。毎日順三さんに手紙を書いて出すからね。順三さんも私に手紙を呉れなきやいけな  
いよ。××女學校寄宿舎にて、としてね。さうよ、寄宿舎にはひるのよ、寄宿舎といふのは  
ね——。」などと私に話して聞かせた。

而して、姉の女學校生活がその期待を裏切らぬ楽しいものであつた事は、その手紙によつても十分に想像された。姉は約束通り、ハイカラな西洋封筒などを使つて、度々私に手紙を呉れた。課業の事、先生の事、お友達の事、寄宿舎の朝夕の事などが紫インクの細い字で細と書かれてゐた。昨夜はいい月夜だつたので、お友達と一緒に窓から月を眺め乍ら唱歌を歌つて居たが、歌つてゐるうちに、家の事や順三さんの事を思ひ出して、かなしくなつて涙を落した——などを書いてよこした事もあつた。「私の可愛い弟の順三さん——（姉はきつと斯う書いてよこした。）あなたは今何をしておいでなの？ 私はね——。」といふ様な文句で

始まる姉の手紙は、いかにも十四歳の女學生らしい氣取りとセンチメンタリズムとで、なかなか達者に上手に書かれてゐた。

「ほ、う、なか／＼よく書いてある。うまい事が言つてあるわい。お千枝はどうして素晴らしい文章家だぞ。だが、こんなに手紙ばかり書いてゐて、肝腎の勉強をする暇があるのかな？」と、父はその手紙を読んで笑つてゐた。

私も三度に一度位の割合で返事を出した。はじめ表書を父に書いて貰つて出すと、姉は、表書も順三さんが自分で書かなければいけない。而して、内容も何人にも相談したり何かしないで、順三さん丈で内緒で手紙を呉れなければいけない、と云つて來たので、今度は自分一個だけの考へで勝手な事を書いて出した。すると、姉からの返事に、順三さんが一人だけで書いて呉れた手紙は大へんに面白かつた。お友達に見せたりして幾度も繰返して讀んだ。これからもあゝいふ手紙を下さい。しかし、表書には矢張、「野村千枝子様」とこちらの姓名をちやんと書いて呉れなければいけない。今度だけは幸ひ受取る事が出來たけれど、唯、「姉上様」だけでは届かないだらうから——と言つて來た。私は、K、市××女學校寄宿舎、姉上様——と唯それ丈を大きな字で墨黒々と書いて出したのであつた。

その女學校も、入つたかと思へばすぐ止めさせられて、姉は、貧しい家の娘として、女中代り下女代りの仕事までしなければならぬ身の上になつたのだ。

姉は、何事も諦めたといふ風に、甲斐々々しく立働いてはゐるが、以來、めつきり陰氣な、而して前よりも一層無口な娘になつた。女學校で仲よしになつた友達で、よく手紙を寄越す人があつたが、その手紙が來ると、姉は夜晩くまでかゝつて長い返事を書いては出し書いては出した。而して、その二三日は妙にぼんやりとして、何か考へ込むのが癖であつた。

「姉さん何してるの？」

空の手桶を提げたまゝ井戸端に立つて、ちつと何か思ひ耽つてゐる姉に、斯う聲をかける

と、びつくりと我に歸つて、  
「何もしちやゐないわ。」と、怒つたやうに私を睨んだが、その眼には、ちら／＼と涙が光つてゐた。

つい此間まで、お嬢様お嬢様とちやほやされて、下にも置かれずに育つた姉が、さうして水仕わざなどしてゐるのを見ると、村の人達も皆いとしがつた。而して、

「新屋のお嬢様がまあ、此頃ぢや御飯焚をなさるぞい！」などと、何か不思議なことでもあるやうに取沙汰したが、しかしそれも當座のことで、半年経ち一年経つにつれて、それは

何でも無い、あたり前の事に過ぎなくなつた。私達はもうお嬢様でも坊ちやんでもない。ただ、貧しい家の憐れな兄弟でしなくなつて了つた。何人ももう特別に尊敬して呉れないばかりか、却つて侮蔑的な眼で見るやうになり、いつの間にか、「お嬢様」「坊ちやん」などと呼ぶ事さへ止めて了つた。

「(落ちぶれて袖に涙のかゝる時……) つていふ歌があるが、——本當にどいつもこいつも皆恩知らず！」

愚痴つぽい母は、折に觸れてはこんなことを云つて、口惜し涙を流したりする事があつたが、姉は、

「構はずに居りやいゝ！ どうせあんな者。腹を立てたりして、相手にするだけ恥だから。」と云つてゐた。姉の持前の此の矜持は、さういふ境遇の中で益々募つて行くやうに見えた。姉は、人に對しても口數が少なく、愛想笑ひ一つしなかつた。例へば、隣のをばさんといふ様な人にさへ、決して打解けた風は見せないで、いつも、つんとして上から見下すやうにしてゐた。だから村の人達の中には、「しつかりしてはゐるけれど、いやにけんだ、かな娘だ。いくらお嬢様顔をして上品振つたつて。」などと、悪口を云ふ者も尠なくなつた。實際、私などでさへ、姉さんは何故あんなにとりすましてばかりゐるだらう？ と、時々思ふ事があつ

た。姉は、物の言ひ方でも、もとからこの邊の外の娘達のやうに、ぞんざいでは無かつたが、時々非常に丁寧な氣取つた言葉遣ひをして見たりする事があつた。

「順三さん。あなた、そんなになまけてばかり居ちや駄目ですよ。何故、もつと勉強なさらない？」

一寸首を傾げて、その大きな眼でちつと此方の顔を見つめて、こんな風に改まつた調子で云つたりする姉の妙にお芝居めいた様子を見ると、私は何だかをかしかつた。さうして、すぐに反感が起つて来て、

「何だい。ちやんと勉強はしてらい、餘計なお世話だい！」などと、態と亂暴な返事をする

「何故、順三さんは然うでせう。」などと溜息を吐くのだつた。——今思へば、姉はさういふ時、何かを夢みてゐたのだつた。さういふ時姉は本當に此上もない良い娘になつてゐた。朝は暗いうちに起きた。一日中一刻の隙もなく働き続けた。さうして夜になると、

「阿母さん肩を揉んで上げませう。」といつて、母が辭退するのも肯かずにその肩を捕へたりた。而してその上、夜おそく、皆が寝て了つた後までも、本を讀んだり、日記をつけたり、女學校の友達への長い手紙を書いたりするのであつた。

「——千枝子は本當に不仕合な娘で御座います。けれども何事も運命だと思つてあきらめて居りますの、あゝ、何といふかなしい辛い私の運命なんでせう。しかし、そのかなしい辛い運命の中で、千枝子は飽迄も正しい清い健氣な少女として生きて行かうと思ひますの。」

その手紙にはこんな風に書かれてあつたに違ひなかつた。姉がその頃つけた日記を後で見つけたが、それには到るところにこんな風の感想が記されてあつた。さういふ時、姉は自分を、少女雜誌などで讀んだ、その、「正しい清い健氣な少女のメロイ」か何かに擬してゐたのだつた。

が、さういふ夢は、一週間と續く事は殆ど無かつた。さういふ状態の後には、妙に懶い様子でぼんやりと考へ込んだり、腹立ちつぽかつたり、すぐに泣き出したりするやうな状態が來た。姉の氣分は、まるで小猫の眼のやうによく變るのであつた。

「ほんたうに何といふ妙な子だらう。」と、母はいつも云つてゐた。「あの子は子供の時からむし持ちだつたが、あれもみんなむしのせむかも知れない。けれど本當にあの子は妙な子だよ。黙まつてばかりゐて、何を考へてゐるのか些とも氣が知れない。」と母は云つてゐた。

姉は、小さい時から、あまり親に馴染まない子だつた。而して、唯自分だけで何か考へてゐるやうな性質だつた。だから母は、いつも何か知ら憚るやうな調子で姉に對して居るやう

だつた。

兎に角姉は、年のわりにはしつかりした、伶俐な、また慥かに健氣な娘だつたに違ひ無い。而して、色の青い細面の、眼の大きな、たいして美しいといふ方では無かつたけれど、田舎育ちにしては珍らしく品位のある娘として、姉は十五になり十六になり十七になつた。

家の状態は益々悪くなつて行つた。それを盛り返さうと、いろ／＼にあせつて見ても、何一つ思ふやうにならない苛立たしさから、父は一日増しに不機嫌な氣難かしい人になつた。何か目ろむ事があると見えて、手摺れた赤革の靴を抱へ古びた山高帽を被つてよく町の方へ出かけて行つては、夜晩くなつて歸つたが、ぐつたりと疲れて、その暗い顔に目ばかりきらきら輝かして居た。而して、暗い灯の下でちびり／＼と晩酌をやり乍ら、何か知らないぢ／＼と母に小言を言ひ始めるのだつた。いつも青褪めた顔をおど／＼とさせてゐる母であつたが、時とすると、その口許をひく／＼とひきつらせながら、聲を戦かして、激しく父に喰つてかゝる事もあつた。それは私達にとつて、此上も無くななしい淺ましい光景だつた。

「阿母さんがいけないのよ。——けれどお父さんも悪いのよ。」と、姉は涙を湛へた眼の底に冷笑に似た表情を浮べて云ふのだつたが、

「本當にいやになつてしまふ。順三さんと二人で何處へ行つちまひ度いと思ふわ。」と、小さ

い肩を溜息で揺り上げる事もあつた。

その上、貧しさは日増しに募つて來た。それにつれて周囲の侮蔑は益々加はつて來た。廣い邸の隅にたつた一つ残された狭い家の、暗い濕っぽい空氣の中で、私達四人は世の中から捨て去られたやうな淋しい朝夕を、みじめに暮らしつゞけてゐた。

姉は全くひとりぼつちだつた。父も母もそんな風だつたし、私は未だほんの子供でしか無かつた。近所に同じ年頃の娘達も澤山あつたが、姉は決してその交際の中へ入らうとはしなかつた。また娘達の方でも、

「あんなお上品なお嬢様とは、おれなんか口も利け無い。」などと言つて敬遠してゐたので、姉には誰一人話相手も無かつた。女學校のお友達もあまりよく返事を呉れなくなつた。而して一年経ち二年経つうちに、遂に全く打絶えて了つた。唯だ一といろ宛の新聞と雑誌と、時時町の本屋からとりよせる小説本と、それから古い本箱の底から探し出された昔の物語類などどが、姉の孤獨の伴侶であつた。讀書好きの姉は、忙しい仕事の隙々に、それ等を貪り讀むことを何よりの慰めとしてゐた。姉の機臺の傍には——姉は貧しい生計を助ける爲めに甲斐絹の賃機を織つてゐた——いつでも屹度何かの本が置かれてあつた。「黒潮」「小公子」など

その頃流行してゐたいろくの物語にも大抵目を通してゐたが、空想的な姉は、哀しい、けれども華やかなその物語の世界に全く心を吸ひ込まれて、その中の男女と一緒になつて欣んだり悲しんだりするのだつた。

「本當に道子は可愛さうだわ。たうとう尼寺へはひつて了つて——、而して、お隅といふお妾の憎らしい事ツつたら。」姉は、その人達が今身近くに生きて居でもするやうに、溜息を吐いたり眼を涙含ませたりして、こんな風にいふのだつた。

「道子つて何だえ？ どうして尼寺へなんかはひつたの？」と私がきくと、

「道子といふのはね。華族の——藤澤伯爵といふ人の令嬢なの。お父さんの伯爵がお隅といふ身分の卑しいお妾に迷つてね——。」

姉がしみぐとした調子で話してきかせるさういふ物語の世界は、私にもおぼろげながら想像出来ない事は無かつたが、姉の感動の仕方があまり馬鹿々々しいやうに思はれて、

「ふん！ 道子つて、女の癖に坊主になつたりして可笑しいなあ。」などと、わざとそんな調子でいふと、姉はすつかり怒つて了つて、

「どうせ、こんな哀れな話は順三さんなんかの様な腕白ツ子にや判りやしないよ。本當に順三さんたら、此頃はすつかりいけなくなつて——まるで不良少年みたんだよ。」などと云ふ

のだつた。私は飛んだところで遣つ付けられて尠ならず不平だつたが、私ももう姉にとつて(私の可愛い弟の順三さん)などでは何時の間にか無くなつてしまつたのだつた。

正月やお盆の休みは勿論、その折々の物日などには、村の娘達は髪を結つて晴衣に着換へて、それぐの仲間を誘ひ合つて町の方に遊びに行つたりするのだが、唯一人仲間外れにされた姉は、さういふ時も家に籠つて、好きな本を讀んだり、何かぼんやりと考へ込んだりしてゐた。村中の者が一年中の楽しみにして總出で出かける祭の夜などでさへ、姉は矢張、一歩も外へ出ようとはしなかつた。

母は平常から、姉がみだりがましい娘達などの仲間に入らうとしないのを喜んで、

「私どものは、本當に變人で——。」などといふ言葉の裏に、ある誇りを籠めて人にも話してゐるのだつたが、あまり極端なその「變人」振りを見ると何か不安にもなつて來ると見えて、「お千枝よ。今夜位は出かけて見たらいぢやないか。さうお前の様に引込んでばかりゐても。」などとすゝめるのであつた。

「だつて、つまらないぢやありませんか。唯わあく騒いでゐる丈で。」

「でも、あゝして皆出て行くのだから、たまにや出かけて見たら——。」

「だつて、私にや伴も無し——。」

「順三と一緒においでよ。——順三、姉さんと一緒に行つてお上げ！」

「あゝ行つてもいい。」と私が云ふと、

「行きませうか？ 順三さん、ぢや、もう一度行つてお呉れ。」と姉は急に行く氣になつて、支度を始めたが、そのうちにまた氣がかはつて、

「止さう。行つて見たつてしやうが無い。——それにこんなへんな着物を着て。」

「だつてお前、そんな事を云つたつて——。」さういふ母の言葉を掻き散らすやうに、

「着物一つあるぢや無し、人中へ出て笑はれるのはいやだ！」と、平素の姉にも似合はない事を云ひ出して駄々ツ子のやうにじれ出すのだつた。

「今になつてそんな事を云つたつて。揃ひを誂へようといつたのにお前がいらなないといつたんぢやないか。そんなら、お止し、お止し！」と、母もすぐいらくして、こんな風にいふと、

「だから、私、はじめからいやだと云つてるんぢやありませんか。」と、姉は涙聲で云つて、帯を締めかけたまゝそこへつツ伏してすゝり上げるのだつた。

でも、やがて又氣を取り直して、一寸白粉を塗り直したりして、姉は私と一緒に出かけたが、姉の心持は妙にこじれて了つて、浮々とした周囲の氣分と融け合ふ事が出来ないやうに

見えた。浴衣の袖を仄めかして、からころと下駄の音まで楽しげに、笑ひさゞめきながら行く娘達や、猥らな歌を聲高く歌つて、「よう！ 別嬪さん！」などと不遠慮にその娘達をからかひ乍ら行く若衆達や、——姉はさういふ群から身をそばめるやうにして、しつかりと私の手を握つて歩いてゐたが、鎮守の森の入口の長い並木道のところまで行くと、びたりと足をとめて、だしぬけに、

「順三さん。歸りませう！」と怒つたやうな調子で云つた。さうしてぐいぐいと私の手を引張るのだつた。姉に手を引張られながら、私は、その夜風に揺らぐ繪行燈の灯影の木蔭の闇にほのめくあたりに、巢に籠つた鳥の様に肩と肩とをよせ合せて何かさゝやき合つてゐる男と女とを見た。よく眼をとめて見ると、さういふ幾組かゞそこにもこゝにもゐた。天鷲絨のやうに柔かな晩夏の夜の闇は、そこともなく、含み笑ひの聲や熱したさゝやきをこめて、生ぬるくいきてゐた。

人通りのすくない、淋しい原中の道にかゝると、姉はだしぬけに、

「ね、順三さん！」と呼びかけた。私は無理に引張りかへされたのが少し不服だつたので、返事をしずらると、姉は、

「ね、順三さん！」ともう一度呼びかけて、

「何て云ふ人達なんだらう、何といふまあ下等なみだらな人達なんだらう。まるで獣みたい  
な——ほんとにまるで獣みたいな——。」と喘ぐやうに云ふのだつた。

而して、姉は、此の村の娘達などの中には一人として本當の女の道を知つてゐる者は無いの  
だ。皆、墮落してゐるのだ。それほど墮落して居乍ら、自分が墮落してゐるといふ事さへ知  
つてゐないのだ——何でもこんな風の事を、聞き手が私である事を忘れて了つた様に、大へ  
ん昂奮した調子で繰返して、

「あゝ、いやだ、いやだ！ 何處を見てもいやな事ばかりだ。私、もつと高尚な人達の住ん  
でゐる處へ行き度い、もつと高尚な——たとへばね、たとへば——。」  
せつかちな調子でさう云ひかけて少し口籠つたが、

「本當にいやだ！ いやだ！ 私、本當にどつかへ行つちまひたい！」と急に調子を變へて  
何か吐き出すやうに云ふのだつた。さう云つて、力一ぱいに私の手を握り締めた姉の掌は、  
火のやうに熱く而して汗ばんでゐた。

姉が十八、私が十三になつた年だつた。高等二年になつた——その時分は尋常科が四年ま  
でしか無くて、高等科の二年は今の尋常六年に當つてゐた——私の級は、河井先生といふ若

い師範學校出の、新任の先生の受持になつたが、此の河井先生はどういふものか大へん私を  
可愛がつて呉れた。河井先生は、私の部落のはづれの丘にある常光寺といふお寺に下宿して  
ゐたので、私は毎朝行きがけにそこに立寄つて、先生と一緒に學校へ行くのを例とした。私  
がおそい時など、先生の方で私を誘つて呉れる事もあつた。

「未だですかあ——。」

私の家の前の茶の木垣の處に立つて、一寸家の中を覗き込むやうにして、斯う語尾を少し  
引張つて呼びかける先生の聲を聞きつけると、障子際の機臺はたたいの上から、姉は、

「順三さん。——先生。」と小聲で私に知らせた。未だ學生じみた氣さくな先生は、つ  
か／＼と縁先まではひつて来て、心易さうな微笑で一寸姉の方に會釋したりしたが、さうい  
ふ時、姉は大へんどぎまぎして顔を眞赤にして、身の置きどころも無いといふ様な様子をす  
るのだつた。

原中の道を二人で歩きながら、先生はふと、

「順三さんの姉さん。いくつだつたね。十七？ 十八？」などとよく問ひかけた。

「十八です。」私はもう何遍も答へた筈の答へを繰返した。

「——君の姉さんは、何だ。此邊の娘のやうぢや無いね。ほんとに上品な、おとなしい人

だね。順三君は、本當にいゝ姉さんを持つてゐるね。」さう云つて先生は心もち顔を赤くした。

私は何と答へていゝか判らないので、押黙つてゐると、先生もそれきり黙つてしまつて、何だかばつ、の悪い沈黙が二人の間に續くのだつた。此の若い先生が姉に或る好意を寄せてゐるといふ事は私の子供心にもよくわかつた。

「河井先生は順三さんばかり最負してゐる。河井先生は、順三さんの姉さんに惚れてゐるんだ。」などと、誰が云ひ出したのか、逸早くもそんなことを云ひ囃す者もあつた。先生は、姉の本好きな事を私が話すと、姉の爲めに二三冊を貸して呉れたりした。先生が貸して呉れたのは、皆外國の新しい小説の翻譯だつた。さうして、ところ／＼に赤い傍線が引いてあつたり、感想めいた文句が書き込んであつたりした。

「何んだか、こんなのは私にはむづかしくて分らないわ。」などと云ひ乍らも、姉は熱心にそれを讀んだ。而して、

「矢張面白いわ。順三さん、又外のを借りて來て下さい。」と云つて、私に、又別の本を借りさせた。しかし、先生と姉とは、ろく／＼口も利き合つた事はなかつた。たゞに先生が私の家に立寄る時一寸會釋を交す位の事であつた。先生が何か一寸話しかけるやうな事がある

と、姉はもうどうしていゝかわからないやうにおど／＼としてしまつて、そこに居たたまれず奥の方に逃げ込んで了ふといふ風だつた。

「河井先生がな、姉さんの事をな。」私がふとした機會にさう姉に云ひ出すと、姉は思ひもかけず眞赤になつて、而してひどく慌てた調子で、

「私の事を何とか云つて？」と問ひ返した。

「此邊の娘達の様ぢや無いつて。上品な、おとなしい人だつて。」と、私が少しは媚びるやうな氣持で河井先生の言葉を傳へると、

「まあ、そんな事を云つて？」と、姉は一層顔を赤くした。而して、口元にはにかみ笑ひを浮べて、輝きとるるみともつた大きな眼でぢつと眼の前の空間を探るやうにして、少しの間おしだまつてゐたが、

「でも、私、あんなちよ／＼した人は大嫌ひ！」と、小さく吐き捨てるやうに云つた。而して妙に、意地の悪い、皮肉な調子になつて、あの先生はまるで小僧ツ子みたいだの、あの先生の歩きつきがをかしいの、あの先生は女みたやうな聲で口をきくのと、いろ／＼悪口を云ひ出したので、私はたうとう腹を立てゝ了つた。

「何だ。えらさうに人の悪口ばかり云つて、姉さんの高慢ちき！」私が突ツかゝるやうに云



ふと、

「それがどうしたの？ どうせ私は高慢ちきさ。」

「高慢ちきのお變人！」

「どうせさうさ。」姉は下唇を嚙んで、一寸頬の處にひきつるやうな冷たい笑を浮べたが、

「順三さんはこの頃だんくいけなくなつたのね。——順三さんまでが、あんな事を言つて姉さんを苛めるんだね。」と云つて、恨めしさうに私を睨みつけた。その眼にはいつの間にか一ぱいに涙が湛へられてゐた。さうして一寸した事にも直ぐに泣き出したりする姉の此の頃の癖は、いつも私を驚かした。

河井先生はたつた一學年教へた丈で、K市の方へ轉任して行つたが、その轉任先からも再度手紙を呉れた。その手紙には、「姉さんもお變りはありませんか。」といふ様な文句が書いて無い事はなかつた。私は一番好きな先生だつたので、こちらからもよく手紙を出した。而して先生からの返事を何よりの楽しみにして待つてゐた。

「順三さん。お待兼の手紙！」

私が學校から歸ると、姉は郵便屋から受取つて、機臺の上の管箱くだばきの中にとつて置いた手紙を、かういつて微笑を含んで、私に渡して呉れるのであつた。それを受取る間ももどかしい

といふ様に、すぐに封を切つて私が讀んでゐると、姉は、傍によつて來て、

「何が書いてあるの？ そんなに長く。」などと云ひながら後から覗き込んだ。而して、「姉さんによろしく——」などと書かれたところに出會すと、姉は一寸顔を赤くしながらも、

「をかした人ね。」などと馬鹿にした様に笑つた。而して、私が讀んで了ふと、

「一寸貸してお見せ。」などと云つて、自分でも一度讀返して見るのだつた。しかし、その手紙には、姉にとつて面白さうな事は些ちひとも書いてなかつた。——それにも拘らず、姉は、私と同じやうに河井先生の手紙を待つて、「何時返事を出して？ もう手紙が來る時分だわね。」などと云ふのだつた。

「順三さん。御免なさいね。つい、破いちやつて。」

私に見せないうちに、封を破いて了つて、顔を赤くして詫びた事もあつた。

「ひどいや、姉さん。他に來た手紙を先に讀んだりなぞして、ひどいや！」と、私が腹を立て、いふと、

「御免なさい。本當に、つい破いちやつたんだから。御免なさい。あやまりますから。私が悪かつたのですから。」と、姉は氣の毒な程あわて、詫びるのであつた。

今思へば、姉は何處かからの手紙を何處からといふ、あても無しに待つてゐたのかも知れなかつた。——けれども何處からもそれは來なかつたのだ。さうして、何ものかを待ち望み何ものかに憧れながら、何一つ與へられる事の無い、淋しい、ひとりぼつちの月日の中に、姉の娘の盛りは過されて行つたのだつた。

本當に姉は淋しい娘だつた。村の風儀はひどく亂れてゐて、どこのたれは男と逃げたとか、どこのたれは私生兒を産んだとかいふ噂が始終絶えなかつたが、さういふ噂をきくと、姉は、意地の悪いやうな侮蔑の表情を浮べて、

「本當に獣みたいな人達だ。——でも人間は好きなやうにするがいゝわー」などといつてゐた。しかし、さうして、その放縱な娘達の仲間を冷やかに見おろしてゐるやうな姉の朝夕は、また餘りに慰めの無さ過ぎるものだつた。姉にあるものは唯忙しさと貧しさとだけだつた。どん底に落ちたと云つても、私の家がその時分ほどどん底に落ち切つて居た事は無かつた。姉が朝から晩まで織り暮らすその賃機の織賃が無くてはならぬ生計の料だつた。姉はもう本など讀む事をしなくなつた。本など讀んで、あてもない美しい夢を追ふやうな餘裕は、もうその境遇からもそしてその心からも失はれて了つたのだつた。

姉はだん／＼憂鬱な氣むづかしい人になつて來た。元來無口であつたのが、一層だまりん

坊になつて、二日も三日も口を利かずに、何かぢつと眼の前の空間を見詰めるやうな又自分の心の底を見つめるやうな眼附をして、執拗に考へ込んでゐる事などがよくあつた。苛々と腹立ちツぽくなつたり、何でも無い事に泣いたりするやうな、前からのヒステリーの傾向は一日増しに募つて來て、時々、はしたなく母と口争ひをする事などもあつた。而して悲しい事には、「またお千枝のむしが起つた!」と云つて嘆息する母自身も、矢張姉と同じやうな、いや、姉よりもつとひどいヒステリーになつてゐたのであつた。氣の小さい苦勞性な母はこの數年來の絶間の無い不仕合にいぢめつけられて、すつかり身體をも心をも傷めて了つてゐた。

「お千枝も可哀さうだ。他の娘達とは違つて、遊びに一つ出るぢやなし、何一つ樂みがあるぢやなし——それに彼の子は本當のお嬢さん育ちで、あゝして働ける身體からだでも無いのに。」などと母はしみ／＼とした調子で云ふ事もあつた。姉の不満や悲みや、母にだつてわからない事は無かつたに違ひない。而して、不憫とも可哀想とも思つたに違ひない。けれども母にはやさしくそれを慰めてやる丈の心の餘裕が無かつたのだ。姉が何といふ事なしに泣いてゐたりすると、母は、すぐに、それを何か自分にあてつけてでもゐるといふ風にとつて、

「何がそんなに悲しいんだよ。何にもそんなに泣く事は無いぢやないか?」などと、突懸か

るやうな調子で云ふのだつた。すると、

「阿母さん。私、たゞ泣き度いから泣くんですよ。別に阿母さんにあてつけて泣くんぢやありません。唯、泣き度いんだから、氣にしないで泣かせて下さいよ。」姉は臉のはれぼつたく赤らんだ眼に淋しく微笑みながら、こんな事を云ふのだつた。

「泣き度いことあ何人だつて同じだ。お千枝ツたら、泣いちゃあおれをいぢめる。お父さんでもお千枝でも些ともおれの氣を察しちや呉れないで。」

「私は些とも阿母さんをいぢめる氣なんぞありません。阿母さんこそ些とは私の身になつて呉れたつていゝ！」

「お前がいぢめる氣がなくてもな。さうお前のやうに黙つて、いやあな顔をして、泣いたりなど許りしてるのを見る俺の身になつて見ろ。親の身になりや、どんなにつらいか——。」

「だつて、本當に、私、何だか悲しくなるんだから——。」  
こんな風の言ひ合が次第に嵩じて、お互に心にもないひどい言葉を投げ交はすやうな事がすくなくなかつた。

「あゝ、いや、いや！ 私本當にどこかへ行つて終ひ度い！」と、姉が機臺の上につつ伏してすゝり上げると、

「どこへでも行くがいゝ！ 親を捨てゝでも好きな處へ行くのが當世だよ。」さういふ母の頬にも涙が流れた。

父はそんな時、苦り切つた顔をして溜息をついてゐたが、しまひには我慢しきれなくなつた様に、

「おい、二人とも可加減に止めろ！ 馬鹿共が！」と怒鳴りつけるのだつた。私にしても、さうして母と姉とが、罵り合ひ泣き合ふのを見るほど、いやな事は無かつた。而して、前とはまるで人が變つて了つた様な姉のはしたない様子を見ると、哀しい氣がしずにはゐられなかつた。父と母とが物の言ひ合ひなどと淺間しがつて泣いた姉が、自分でその淺間しい事を繰返してゐるのだ。而して、あれほど矜持の強い氣位の高い、高尚な事ばかり考へてゐるやうな姉が、「私などは唯働いてさへゐりやいゝのだ。一生奉公に來たつもりで死ぬまでかうして働いてゐりやいゝのだ。」の、「いくら働いても着物一枚出来るんぢやなし。」のと、そこいらの娘達でもいひさうな事をいつて母に喰つてかゝつたりするのだ。「あゝ、姉さんは此頃どうかして了つた。」と、私は心から溜息をせずにはゐられなかつた。

「姉さん、どうしたんだい？ どうしたんだい？」私は、母とさういふ言ひ合ひをして、納戸の隅の長持の上に額を伏せたりしていつまでも泣いてゐる姉の傍へ行つて、涙含んだ聲

で、詰るやうにかういふと、姉はすゝり泣きの間から、

「あんまり阿母さんがいろ／＼の事を云ふもんだから。」と辯解する様に云ふのだつた。

「だつて、阿母様はあゝいふ人ぢやないか。病人みたいな人ぢやないか？」

「それはわかつてゐるけど——さうだけど。」

さういつてかぼそい肩を小刻みに慄はしてゐるのを見ると、私は、本當に姉さんも可哀さうだと思はずにはゐられなかつた。

「姉さんもどうかしてゐるんだよ。」と、私は優しくなだめるやうに云つた。

「本當に私もどうかしてゐるの。矢張がまんが足りないんだらうけれど。」と云つて、姉は涙に濡れた顔に、詫びるやうな恥ぢるやうな表情を浮べてちらと私の方を見たが、

「でもね、順三さん、私は本當に死んだ方がいゝと思ふの。かうして生きて居たつて本當に生き甲斐がないやうな氣がするの。——もうくさ／＼してくさ／＼して仕やうがないの。何でもいゝから手當り次第に滅茶苦茶に破くか裂くかしたいやうな氣になつて——。」と云つて、その涙に洗はれて、きらきらと輝くやうな眼を大きく開いてちつと壁の上を見つめるやうにして、

「本當に、私どつかへ行つて了ひたい——遠くの方へ、どつかまるきり別の、遠くの方へ。」

などと云ふのであつた。

そんな事があつた後、姉はつとめて自分を抑へるやうにして、従前の姉のもつてゐたあのつゝましやかさ物靜かさを取戻したやうに見えたが、すぐに又、いら／＼と荒んで來る心をどうする事も出來ないのであつた。「お上品振る」などと云はれた丈に、いつも髪などを綺麗に結つてきちんとして澄ましてゐたのが、今では、妙に物憂げなだらしない様子をして、ぼさ／＼になつた髪の下から、眼ばかりきら／＼と輝かしてゐるやうな姉、而して喪心したやうに何かぼんやりと考へ込んでばかりゐるやうな姉——さう云ふ姉を見ると、私は心を痛めずにはゐられなかつた。私はもう十四になつてゐた。

そんな風にしてゐるうちに、姉は突然家出をして了つた。それは姉が十九の厄年の暮近くであつた。

その時の父、母、私の驚きは云ふまでも無い。

姉はその頃眼を悪くしてゐたので、一月ばかりつゞけて毎日夕飯前の時刻に町の醫者に通つてゐたが、其の日いつまで経つても歸つて來ないので、私は母に命じられて、醫者の家まで見に行つた。すると、もう疾くに歸つたといふ事だつた。どこにも立寄る様な友達も無し、

どうした事かと心配しながら夜の十時頃まで待つて見たが、それでも未だ歸らないので、愈何かの變事が起つたに違ひないと見て、近所の人達にも話して、親戚の家その他、心當りの方々に手わけをして夜通し尋ね探して見たが何の手がかりも無かつた。もしやといふ恐れに胸をふるはしながら、近所の人と一緒に、寒い夜風に提灯を振つてS川といふ川の川縁など隈なく跡つけて行つたその時の心持を、私は忘れる事は出来ない。姉はよく、「遠くの方に行つて了ひ度い。」などと云つてゐた。遠くの方とは——？ あゝあの可哀さうな姉さんは死んだのかも知れ無い。此の川に身を投げたのかも知れない——私は、河原の石の上を小走りに歩きながら、闇に白い瀬に向つて思はず大聲で泣き出したのだつた。

が、別に身投げなどした形跡も無かつた。その翌日も、翌々日も、部落中の人手を借りて、すこしでも心當りのあるところは、隈なく尋ねて見たけれど、更に手がかりも無かつた。山林、畑の中——さういふ處まで、文字通りに木を分け草を分けて探したのだが、一向わからなかつた。母は、狂氣のやうになつて、殆ど食ひもせず寝もせず、神様におまゐりをしたり、伺ひ婆さんに伺ひを立て、貰つたりした揚句、四日目の日だつた、朝早くから出て行つて三里ばかりある或る村の名高い易者に易を立て、貰つて來た。その易の表に現はれたところによると、死んでなどはゐない、北の方へ行つた。同伴者がある。必ず歸つて來るが、歸

りの時は長引くかも知れない——といふのだつた。

「死んでさへゐて呉れなきや——」母はさう云つて、ほろ／＼と泣いた。母はその晩になつて、はじめて少し眠る事が出來たやうだつた。そのうちに、妙な風説が私達の耳に入つた。お千枝さんが、男と二人でNといふ村の停車場からK市行きの汽車に乗るのを見た者があつた。時刻も丁度、その日の夕方だつた、といふのだつた。續いて、姉が町の眼醫者に通ふうち、毎日、姉のあとをつけ廻すやうにしてゐた男があつた。それは近頃水道工事の爲めに町へ來てゐる土木の技手で、村の娘達の仲間では評判の男だ。一緒に汽車に乗つた男といふのは何でもその男に違ひない。大學を途中で止めたとか云つてゐるその山下といふ男は、ハイカラで美貌で、其上女に對しては一種不思議な魅力をもつてゐる男だから、つい引ツ掛けたに違ひない——といふ様な風説さへ傳はつて來た。それを聞くと、母は、

「あの子に限つてそんな事があるものか。あの子はそんな馬鹿な子ぢやない。そんなみだらな事をする子ぢやない。」と頭から打消したが、易の表に「同伴者がある。」といふのがどうも氣にかゝるらしかつた。父は、姉の失踪以來、口を利くのも忌々しいといふ風に、ぢつと黙り込んで、暗い顔をして、唯、時々呻くやうに溜息をついてゐるのであつたが、そんな取沙汰を耳にすると、

「誰がそんな事を吐かすのだ！ そんな馬鹿な評判を立てる奴は誰だ。こゝへそいつを連れて来う！」と、眞赤になつて憤つた。私だつて、姉が、男と一緒に逃げたりしたなどといふ事は、まるのきり信じられなかつた。一般の村の娘達にとつては、ありふれた何でもない事だが、姉に限つて、そんな事をする人ぢや決してない——と、私も、堅くそれを信じてゐた。

それから二月程——その二月が、どんなに、暗い不安な、絶望的な、心持の中に過された事か——たつてからの事だつた。思ひ掛けなくも、姉から私にあって、手紙が来た。差出人の名は何とも書いてなかつたが、筆蹟で一目に姉だと知れた。開いて讀むと委細がわかつた。ふとした迷ひでとんだ事をしてつた。或る者に唆かされて無斷で家出したが、今は心から悔いてゐる。どうぞ順三さんからお父さんお母さんに執成して、而して、私を救ひ出しに来て呉れるやうに頼んで下さい——と鉛筆で走り書きしてあつた。而して、福島縣若松市××町××番地××方と今居るところが記されてゐた。

私は先づ母にその手紙を見せた。

「無事でゐて呉れたかい？ 無事でゐて呉れさへすりや。」と母は、ほろ／＼と涙を溢した。父は、その手紙を四角に坐つた膝の上に擴げて、讀んでゐるのかゐらないのか、凡そ五分間ばかり、ぢつと睨みつけるやうにしてゐたが、

「馬鹿が！ 飛んだ業曝らしをしやがつて。死にでもしやがりやいゝのに。」と呻くやうに云つて、大きな溜息を一つした。

すぐに父の旅支度が整へられた。旅費などもどうにか都合して、その翌くる日の未明に父は出かけて行つた。父は、草鞋の紐を結びながら、

「馬鹿な奴めが！ おれは見附け次第殴りころしてやるぞ。」と云つた。圍爐裏の樁火に赤く染められた父の顔には、涙がちか／＼と光つてゐた。

「お父さん。そんな事を云はないで。」と、母は、灰の上にぼた／＼涙の音を立てた。

さうして出かけた父が、姉を連れて歸るまでには一週間ばかりの日數が費された。私と母とはいろ／＼と案じながら、毎晩遅くまで眠らずに待つてゐた。私は學校で使つた日本地圖を探して来て、その中から、その小さな都會を探し出して、そこまでの道筋や里程を調べて見たりした。あの有名な火山の磐梯山、その麓の小さな町——と想像して見ると、何となく浪漫的な情懷がそゝられるやうな氣もするのだつたが、そんな遠くの見知らぬ土地で、みじめな驅落者になつてゐる姉の事を思ふと、私はぢつとして居られない氣がした。それに、父が出て行つたその日から降り出した雪が二日間ずつと降りつゞけて、近年にない大雪になつたのが、雪の深い北國の空を氣遣はせた。大雪で汽車が不通になつたのでは無いかと心配し

たりした。

丁度一週間目の夜、もう十二時近くなつてから、父は姉を連れて歸つて來た。姉は、家にはひるとすぐに上り框のところへつツ伏していつまでも顔を上げなかつた。

「お千枝、お前はまあ——。」母もさういつたきり口が利けなかつた。唯涙ばかりが音も無く流れた。——父も圍爐裏に踏込んでぐつたりと首を垂れたまゝ、一語も云はなかつた。みんながぢつとさうしたまゝ、しばらくの間、物も云はず動きもしなかつた。

姉は、その晩からひどい熱を出して、一週間ばかりの間枕が上らなかつた。枕もとにつききりのやうにして看病してゐる母を見ると、一ぱいに涙を溜めた眼を上げて、

「濟みません、濟みません！」と繰返した。

父は、姉の事など思つて見るのも癪に觸るといふ様子で、姉がさうして寝て居ても、「工合はどうだ？」と聞く事さへしなかつた。而して、量を加へた晩酌の酔がまはると、青ざめた顔に眼を据ゑて、

「俺のうちにや昔から、男と逃げる様な娘は無かつたぞ。男と逃げるやうな、そんな不貞腐れた奴あ無かつたぞ。」と聞えよがしに幾度も幾度も繰返した。

「まあ、阿父さん。病氣で寝てゐる者に——。」と、母がおろ／＼として止めると、

「死んぢまへ。馬鹿な奴が。死んぢまへ！」と怒鳴り立てるのだつた。どんなに貧乏すればとて野村と云へば聞えた家柄だ。どこの馬の骨とも分らぬやうな男と駈落をしたりして、家名を辱め親の顔に泥を塗るやうな、そんな奴は娘とは思はない——父はさう云つて憤つた。而して、さういふ身もちの點では、すつかり安心し切つて居た丈に、裏切られたといふ感じが一層その憤を強くしたのだつた。實際、姉の此度の事件は、すぐに村中の評判になつた。變人などと陰口をきかれてゐたくらゐ身持の堅い娘が、しかも、ろくでもない旅の男などと駈落したといふ事は、誰にも信じられないほど不思議な事だつた。「何だ、いくらお上品ぶつて居たつて矢張——。」などといふ言葉は、私達の耳にもはひつて來た。私は逢ふ人毎が、姉の事について、何か嘲つてでも居るやうに思はれて、毎日學校へ通ふ事さへ辛いと思つた。それにしてはどうして、姉はそんな氣になつたのだらう。どうして、そんな下らない男など、逃げる氣などになつたのだらう？ 私にも姉の心持がわからなかつた。

姉は、絶對に口を利かない人になつて了つた。半月ばかりして、漸く病氣が癒ると、姉はまた貧しい生活の爲めの賃機を織り始めたが、朝から晩まで殆ど一言もものを云はずに、また誰のいふ事をも聞くまいとするやうにがちや／＼と箒を鳴らし續けた。

姉は、しばらくの間に瘦せて青ざめて、すつかり相變りがしてしまつた顔を、冷たくひき

しめて、唯、機械のやうに手足を動かしてゐた。そのちつと眼の前の空間に凝らされた眼は、何も見てゐなかつた。たゞうつろに見開かれてゐる丈だつた。而して、すつかり乾ききつてゐた。姉は、滅多に涙などこぼさない人になつた。

姉がお腹に子を持つてゐる事が判つたのはそれから二月ばかり経つてからの事だつた。

「お前、身體がどうかなくなつてるのぢやないかい？」

ある夕方だつた。裏縁の端のところ、母が、かう姉に囁いてゐるのを私はそつと立聞きした。

「え、どうかしてるのぢやないかい？」

何度も何度も母に詰られると姉は急に聲を呑んで泣き出した。

「何といふ因果だか！」と、母は心から嘆息した。父は、見るもいやだといふ風に、いつも姉の方から顔を背けるやうにしてゐた。而して、むやみに氣むづかしい人になつて、御飯の茶碗を不意に母に投げつけるやうな事がよくあつた。母のヒステリーも一層嵩じて來て、何といふ事もないのに、父と母とはよくいがみ合つた。

しかし姉は、そんな事は自分には些とも關係の無い事だといふ風に、唯、絶間なく箴を鳴らし續けてゐた。石のやうに無表情な顔をして、一言も口を利かずに唯機ばかり織つてゐる

姉の、何を考へてゐるかわからない様子が、それがまた母の心をじれ／＼とさせた。どういふつもりで、そんな男とかけおちなどしたのか、さうしてその二箇月の間をどこ何をしてゐたのか——而して、今どう思つてゐるのか？ 母には一切わからなかつた。男の手から姉をひきとるまでのいろ／＼のいきさつについても、父が些とも話さないので母には何にもわからなかつた。その男がどんな男か、といふ事も、皆目想像さへつかかなかつた。母にとつては——私にとつてもさうだつたが——一切が全く解く事の出来ない謎であつた。

「魔がさしたのだ！ こんな馬鹿な事があるもんぢや無い。」と、母は、嘆息と共に始終くりかへしたが、どうも氣が濟まないと思へて、

「な、順三。よくお前から聞いて見て呉れろ！」と、度々私をせついたりした。しかし、私にしても別に聞いて見やうは無かつた。姉は、もう今までの姉では無くなつてゐた。妙に外々しい人になつてゐた。姉の失踪以來の二月の間、どんなに心配しつゞけたか——私はその事を話して、

「でも、本當によかつた。俺あ、姉さんが死んぢやつたかと思つて——、だけど、一體姉さんは何と思つてそんな遠くの方へ行つたんだい？」などと、私がやつとの事で云ひ出すと、姉はそのあとを云はせないやうに、



「本當に濟まない事をして。馬鹿な事をして。順三さん、後生だからもう聞かないで。」と、機臺はたたいの上に突伏して了ふのであつた。

「濟まない事をして。馬鹿な事をして。」と、姉は唯さういふ丈だつた。が、母の心持の中には、唯それ丈聞いたのでは満足しきれないものがあつた。母は、時々狂氣のやうな調子になつて、いろ／＼の事を露骨に詰り問ふ事があつた。

「お千枝、おれには本當にお前の氣持がわからないんだよ。話しておくれ。話しておくれ。どういふつもりで、そんな男なんぞと逃げる氣になつたのだよ！ よ！ どういふつもりで——。」

さうして母が熱して來れば來るほど、姉の冷かな顔附は、一層冷かになるやうに見えた。而して、その顔には、姉の持前の、あの高慢な侮蔑的な表情さへ浮び上つて來るやうに見えた。而して、それが、「そんな事はどうでもいゝ。」とでも云つてゐるやうに、「お母さんなんかにお話したつて仕方が無い。」とでも云つてゐるやうに、受取られるのだつた。母のいら立たしさは次第に嵩じて來て、くわつと眼前めざまがくらんで來るやうにさへなるのだつた。

「さあ、どうしたんだよ。お云ひ！ お云ひ！ さあ、お云ひつたら——。」と、母は手にもつてゐたものを投げ捨て、機臺の傍に迫り寄るのだつた。だが、姉の唇は、錆びついた扉

のやうに動かなかつた。その唇をこぢあけて手を突込んで、否でも應でも何かの言葉を引摺り出さなければ承知出來ないやうな心持が母を支配するらしく見えた。

「さあ、云へつたら、云はないかよ！」と、母は、しまひには、かう物狂はしく叫びながら姉の肩に手をかけて力一ぱいに揺するのだつた。すると、姉の化石したやうな顔にさつと血が潮しほした。而して、急に機臺から降りて、袖で顔をかくしながら、縁側に逃げ出して、庭の方に向いて激しくすゝり上げながら、姉は、胸を絞るやうな聲で切れ／＼に云ふのだつた。

「おつかさん、勘忍して。私が悪いんですから——私が馬鹿なんですから——。」  
かういふ事が何度も繰返されたのであつた。

姉は月が重なるにつれて、次第に大きくなるお腹に、堅く帯を結んで、さうして、毎日毎日、機を織つてゐた。朝は暗い中から、夜は皆が寝て了ふまでも織り續けて、一日に二反宛を織り上げた。ただの身體では無し、それに平常からあまり丈夫な方でもない姉にとつて、さういふ労働は全くひど過ぎた。だが、姉はやつれ果てた青ざめた顔をして、物を云はず傍目もふらず、唯、機械のやうに織りつゞけた。此の世の中にこれより外する事は無いのだといふ風に、一心不亂に織りつゞけた。

「お前、そんなにしないでも、すこし休み／＼しないかえ？」と、母が見かねていふと、姉

は、冷然とした調子で、

「何でもありません。」と云つてゐたが、次第に食も細つて来て、身體の弱つて來るのが眼に見えて來た。しかし、姉は、苦しい息をつき乍ら矢張剛情に織りつゞけ織りつゞけた。

その年の八月、姉は産み月の間際になつて死兒を産んだ。而して、三日の間の非常な苦みの後で、死んで了つた。妊娠時期にあまり激しく身體を使ひ過ぎた事からかういふ結果が導かれた事は明かだつた。

姉は、その臨終の床にあつても、一言もものを云はなかつた。

「姉さん！ 姉さん！」

その息の引きとり際に、私がかう云つて呼ぶと、姉は、ちつと此方を見るやうにしたが、空を見つめるやうなその眼は、「許して下さい。許して下さい。」といつて許しを求めて居るやうに見えた。同時にまた、何者かに向つて責め詰つてゐるやうにも見えた。

小さい時から、あれほど仲の好かつた姉が、何一つ私にその心の苦みを語らうとしないで、他人行儀で外々しく死んで行つた事を考へると、私は口惜しくてかなしくてたまらなかつた。

「不憫な奴め！」と云つて、父はその死骸に向つて涙を流した。その時父は初めて、姉を連

れ出した男が、そんな事を商賣にしてゐるやうな男で、東京へ連れて行く、といつて姉をそのかしたのだといふ事、姉はそのうまい口前にまるめこまれて、ついその氣になつて了つたのだといふ事などを話した。私は、ある時——さうだ、それは河井先生から上京したといふ手紙を受取つた時だつた——姉が、順三さんと二人で東京へ行き度い、そしたら私がお針でも何でもして順三さんを學校へ入れてあげる、私はどんなに苦勞しても順三さんさへ出世して呉れ、ば——などと語つた事を思ひ出した。

母は、それ以來、ぼかんとして、全く喪心状態に陥つて了つた。極度の神經衰弱といふ事で、ひどい健忘性になつてゐたが、姉の一週忌が來ない前に、母も亦その苦しみの生涯を終つた。

姉が亡くなつて一月ばかりたつた時の事だつた。久振で河井先生から手紙が來た。河井先生は、その時分、東京へ出て高等師範學校へはひつてゐたのだつた。小學卒業後の方針はどう定めたか？ いつその事東京へ出て見たらどうか？ などと云ふ事が例の快活な調子で細々と書かれてゐたが、その手紙の末に、「姉さんは御かはり無いが、未だお嫁にもおいでなされずにあるか。二三日うちに小説の本を二三冊お送りする。もう君もかういふものを読み

出す頃であらう——などと書いてあつた。而して、二三日経つと、その本が小包みでとゞいた。それはツルゲエネフの翻譯だつた。その本の頁の上に、私は熱い涙を落したのだつた——。

終  
列  
車  
(九年十二月)

三輪先生は、朝早くから出かけた。中古の背廣に中折帽、紫色の小さい風呂敷包を小脇に抱へ、靴の先に眼を落して、こつくと急ぎ足に歩いた。

「やあ。先生。お早う御座います。」

もう少しで村を出外れようとする處で、斯う呼びかけられて、驚いて振返つて見ると、その畝道から鉄を擔いで出て來たのは、在郷軍人會の會長をしてゐる、村でも働きの者で評判の男だった。

「早いお出かけで、どちらへ？」

「——一寸、K町まで。」と、先生はどきまぎとしながら答へた。

「早いお出かけですな。」と、その男がもう一度斯う云つた時、先生は、何から何まで見抜かれて了つたといふ様な氣がして、

「都合によつたら、その足で、一寸東京へ行つて來ようかと思つてね。」と、本當のところを言つて了つた。

「東京へ？」

「うん。學役の備品で、少し買はなきやならんものがあるし——。」と、先生は少なからず慌て、顔を赤くして、口籠るやうに云つたが、相手は別に氣にもとめないらしく、

「東京も、たまにや宜いですな。ぢや、行つておいでなせえ。」と、一寸、頭を下げて通り過ぎて行つた。

先生はほつとした。而して、もう何人にも逢ふ事の無いやうにと念じながら、急ぎ足で歩いた。

K町を通り抜けて、N村に入つた時も、朝は未だ早く、路傍の茶店のお上さんが、だらしの無い寝起の姿で、戸を繰つてゐたりした。而して、早出の馬力車が三四臺、後から來て追越して行つた外には、人通りも無かつた。

小さな塚があつて、石地藏の立つてゐる處から、細い徑が右の方に岐れて居た。そこへ來ると、彼は立止まつて時計を出して見た。未だ六時をすこし廻つたばかりだった。一寸の間とつおいつしたが、臆て漸く決心したといふ風に、その細い徑の方へ這入つて行つた。枯々の桑畑の間を爪先上りにうねつて行く徑が、彼を丘の上の小さな部落へと導いた。

その部落の取つつき、竹藪を背にして、横手に小さな雑木林を控へた或る貧しげな百姓家の入口に彼が姿を現はすと、

「まあ、先生！」と、その時丁度檐先で鶏の巢の蓋を明けてやつて居た肥つたお上さんが、大きな聲で言つた。先生は、その切れの長い眼を鍵のやうにして、にこくと微笑しながら、

しかし四邊を憚るやうな小聲で、

「一寸序があつたんでね。少し早過ぎると思つたけれど――。」

「さあ、よくいらつしやいましたよ。お坊ちゃんも本當に早起でしてね。もう起つぎしてらつしやるんですよ。さあ、どうぞ此方へ。」と、お上さんが騒々しい調子で言ひ乍ら、土間の方へはひつて行かうとするのを抑へつけるやうにして、

「いや、今日はさうしては居られない。ほんの出掛けに一寸寄つて見ただけなんだからね。」

「何方かへお出掛けで？」

「あゝ、一寸Y市までね。」と、彼はうそを云つた。

「でも、まあ、久振りですからお茶でも呑んで、一つお坊ちゃんを抱いて上げて下さいませよ。さあ、どうぞ。」

「いや、本當にさうしては居られないんだよ。こゝで一寸。――もう眼が覺めてゐるんですか。」と言ひ乍ら、彼は縁先に腰をおろした。

「さうですか。まあ、そんなにお急ぎなんで。」と、お上さんは不本意さうに言つたが、未だ薄暗い家の内部を覗き込む様にして、

「みぎ、みぎ！ お坊ちゃんを連れて來な。」と甲高な聲で呼んだ。而して、其處へ出て來た

十二三の女の兒の背中から、子供を抱き取つて、わツと泣き出すのを、

「おゝ、好い子、好い子。」となだめて、

「さあ、お坊ちゃん。お父さんですよ。お坊ちゃんのお父さんが來て下さつたんですよ。さあ、そんなにお泣きしないで。お父さんですよ。お坊ちゃんのお父さんですよ。」

彼は、お上さんの肩越に、その幼い者を、何か怖い者でもあるかの様にそつと覗き込んだ。漸く泣き止んだ兒は、美しく澄んだきれいな眼を圓く見張つて、ちつと父の顔を見た。

「そうら、お父さん。坊ちゃんのお父さん。さあ、「父さん」と云つて御覽なさい。」お上さんは、連りに囁し立て乍ら、彼の鼻先につきつける様に、その抱いた子を揺り上げ揺り上げた。朝機嫌のいゝ子供は、その眼を、くる、くると動かしながら、大きな口を開いて、「あゝ、あゝ。」と笑つた。

「おゝ、おゝ、お父さんが判りましたか。まあ、あんなに笑つて。」と、お上さんはそれを彼の手に押しつけた。彼は、不器用な手附で、怖々と抱き取つたが、別に、あやし方も知らないで、唯、二三度ひよいくと揺つた。子供は、彼の顔を見ながら、「あゝ、あゝ。」と笑ひつづけた。月足らずで生れて兎角發育の悪い脾弱な子であつたが、それでも近頃は色白にまる／＼と肥つて、此の前に抱いた時よりもずつと重くなつてゐるのが、兩腕に沁みこむぬ

くもりと一緒に、はつきりと感じられた。

「こりや重い。大分、丈夫らしくなりましたね。」

「え、もう此頃はすつかりお丈夫におなりで御座いますよ。それにまあ、何といふきれいなお坊ちやんでせう。こんな汚い中に育つても、矢張血統は争はれないつてね、他様とも話してゐるんですよ。」お上さんは、お世辭といふよりも、寧ろ自慢さうに云つて、自分も傍から、さも可愛くて堪らないといふ風に覗き込んで、

「お、お。お話ですね。お坊ちやんはお父さんとお話ですね。」と、囁し立てるのであつた。

彼は、にこくと微笑し続けながら、子供の顔を見成つた。その眉と眼のところの感じや、口元などが、母の雪子にそっくりであつた。彼はその抱いてゐる両手に、次第に力が加はつて行くのを感じた。四十五の年になつて、初めて経験する此の不思議な愛情は、潮のやうに彼の全身に湧き上つて來た。彼は、たうとう堪らなくなつたといふ風に、一寸、その唇を子供の頬におし當てた。すると子供は、その髭が痛かつたと見えて、

「いやあ、いやあ——。」と、のけ反つて泣き出した。彼は慌て、二三度揺つて見たが、子供は益々泣き募つた。

「やあ、失敗、失敗！」と、先生は苦笑しながら、子供をお上さんに返した。

「お、好い子、好い子。」抱きとつて、乳房を含ませたお上さんは、きまり悪さうに赤くなつてゐる先生の顔を、笑止らしい眼附で見やりながら、

「お腹が空いたんですよ。未だ朝のおつぱいの前でしたからね。」と、とりなし顔に云つた。

彼は、時計を出して見た。もう時間が迫つてゐた。で、又、歸りに寄るかも知れないと云つて立ちあがつた。

「さうですか。ぢや、お歸りに又お寄りなすつて。お坊ちやん、さあ、お父様がお歸りですよ。お父様、はいちやい！はいちやい！」

お上さんは、門口まで子供を抱いて送つて出た。子供は、涙を一ぱい溜めた眼で、ちつと彼の方を見てゐた。

それから三十分の後、三輪先生は午前七時何分かの田町發の上りの三等車の片隅に腰掛けてゐた。ぼんやりと見開いた先生の眼の前には、蕭條とした野山の姿があつたが、先生は何物をも見てはゐなかつた。彼は、たゞ、あの先刻見て來た可愛らしい子供の顔と、今尋ねて行かうとする、あの子の母の雪子の顔とを代るく、思ひ描いてゐた。

やがて彼は、一寸住居<sup>みせ</sup>を直して、後頭部を窓枠<sup>まどわく</sup>の處へ押しあて、顔を少し仰向けてぢつと眼を瞑<sup>つむ</sup>つた。暫くすると、ふと物に愕<sup>おどろ</sup>いたやうに眼を明いたが、ほつと大きな溜息を一つすると、又、靜かにその臉を合せた。

彼の額は白くつややかだつた。而して、秀でた眉や、恰好のよい鼻や、赤くうるんだ唇や——彼の美貌は、彼をその年齢よりもずつと若く見せはしたが、しかしその鬢にはもうちら／＼と白髪が交り、その顔にも、その身體全體にも、老いの影は濃かに纏うてゐた。

それにも拘らず、今、彼の胸の中には、人知れぬ戀のおもひが渦巻いてゐるのであつた。四十を越して、五十近くなつて、人生の「秋」なら未だしも、もう「冬」と云ひ度い時分になつてから、こんな氣持にぶつつからうとは、彼自身も全く思ひ掛けない事だつた。

「不思議なものだ。」と、彼は、思はずその心に呟いた。雪子と初めて逢つた日の事などを思ひ浮べ乍ら——。

……幸か、不幸か、すぐれた美貌の所有者<sup>もちぬし</sup>として生れて來た彼は、十五六の頃から女に騒がれて、此の年までの生涯には、數へ切れないほど多くの戀を経験した來た。彼はその美貌と、又その美貌を二倍にして見せる丈の才氣とで、多くの女を魅し、惑はせ、而して弄んだ。その爲めには幾人もの女の一生を誤らせもしたが、彼自身の運命も従つて狂はせられずには

居なかつた。有爲の材を抱きながら、小學校の教師などになつて、山の中の小さい村に最後の落着き場を探しあてた時は、彼はもうすつかり世間に疲れてゐた。世間に疲れると共に女にも疲れてゐた。妻もない子も無い彼は、かうして温厚な、忠實な小學校の校長さんとして、靜かに殘年を送らうと、その心を決めてゐたのであつた。

ところが、そこへ現はれたのが雪子であつた。

彼を入れて、教師が皆で三四人しか無い小さな學校。そこへY市の女學校を卒業すると直ぐに教師になつてやつて來た雪子は、その時十九といふ年齢<sup>と</sup>にしてはひどく子供っぽい娘で、親を離れ友を離れて、そんな山の中に遣られて來た心細さから、時々、教室の窓に凭りかゝつて、しく／＼と泣いてゐたりした。

「どうしたね。又、里ごゝろが起りましたかね。」

彼が優しく微笑しながら斯う慰めると、涙含んだ眼に恥かしさうな微笑を浮べて、そつと窓帳<sup>まどかひ</sup>の蔭に顔を隠したりした。その様子を、彼はたまらなく可愛く思つた。片親の一人の母と共に、義兄の許に淋しく育つて、その餘り親みの無い姉の外には別に兄弟もなく、此世に何も頼りの無い身の上だ、といふ身上話も、彼の心を動かさずには居なかつた。東京には伯母が居る、出來るならば東京へ出て、繪の勉強をして見たい、などとその私<sup>ひそ</sup>かな希望をつゝ

ましやかな調子で打開けた事もあつた。

「淋しくなつたらね、私の許へ遊びにいらつしやい。」

「え。」と、彼女は、嬉しさうにうなづいたが、それから、折々、彼の許を訪ねて来るやうになつた。赤い色の帯揚などを見せて、袴を着けた時とはまた違ふ娘々した風をしてやつて来ては、或る家の離屋を借りて不自由な繹暮らしをしてゐる彼の爲めに、何かと身の廻りの世話などして呉れる雪子の姿は、彼の寂寥な生活をどんなに色彩づけ、彼の無聊な朝夕をどんなに楽しいものにして呉れたか？ 雪子は、沈み勝ちな大人しい娘であつたが、どうかすると見違へるほど快活になつて、子供のやうに戯れたりする事があつた。本來は明るい、無邪氣な性質であるが、その境遇のために妙に分別臭くされて、伸び度いところも伸びずに居たといふやうな彼女は、十分に信じ頼る事の出来る人を彼に見出すと、すつかり自分を打ち任せて甘えまつはるやうな態度を見せたのであつた。

「可愛い娘——」などと、彼は戯れに呼んでゐたが、實際、彼は雪子に對する愛のうちに、今まで曾て感じた事の無い、父親の娘に對するやうな心持を見出して、自分の何時の間にか老い込んで了つた事を考へたのであつた。しかし、矢張、娘にしては置け無いやうな悪性の血が、久しい間眠つてゐたその血が、次第に喚び覺され、蘇つて来るのを感じずにはゐられ

なかつた。さう美しいといふのでは無いが、眼のきれいな細面に、小さい唇がぼつりと朱の點を打つて、撫肩のすんなりとしたところなどが、彼が二十年の昔に戀した或る娘の倂を思ひ浮べさせた。數知れぬほど多くの昔の女達のなかで、不思議に忘れ難い印象を残してゐるその娘は、彼が未だ東京の方で勉強して居た頃に入出してゐた或る先輩の二番目の娘で、誠實な、而して熱烈な愛を彼に捧げてゐた。しかし、彼は、外の總ての女に對してと同じやうに、唯、その身體を弄んだ丈で、素氣無く捨て、了つたのであつたが、その深い情は、今でも彼の心に残つてゐた。而して、今、雪子に對してゐると、その頃の或夜或時に、丁度こんな風にしてあの女と對してゐた事などが、ふと思ひ出されて、妙に唆られるやうな氣持がして來るのであつた。

これはいけないぞ、と、彼が自ら警戒し初めた時は、しかし、もう遅かつた。餘りに隔てなく馴れ親んで來る彼女の若々しい心と身體との前に、彼の自制はたうとう何の役にも立たなかつた。

年甲斐も無い自分の過を恥ぢもすれば悔いもして、穴があれば入り度さうにしてゐたその翌朝の彼の前に、しかし、雪子は案外事も無げな様子をしてゐた。而して、それから前の通り、繁々と彼の許に尋ねて來る事を止めなかつた。この「可愛い娘」の心の裡に、何時の間



にか、何時さういふ事になつても構はない丈の戀が準備されてゐたといふ事は、彼にとつては全く意外であつた。此の年になつてから、斯ういふ純な初々しい若い娘の愛を得ようとは、實際思ひ掛け無い事だつた。彼女は思ひつめた娘氣といふやうなもので、心から、眞剣に、彼を慕ひ、彼を戀したのであつた。

灰燼の中から又新しい火が——恐らく彼の生涯のこれが最後の焔が、斯うして燃え上つた。だが、彼はもう疲れてゐた。彼の外貌はその四十五といふ年よりもずつと若く見えたが、彼の心は、その年よりもずつと老い疲れてゐた。その老い疲れてゐる彼の心には、彼女の若若しい生命の力が、一つの煩はしい負擔として感じられる時もあつた。而して、困つた事には、その中に彼女は唯の身體では無くなつたのであつた。

「どうもへんなのよ。私、どうしたらいいでせう？」と、彼女が恥と懼れとに身をふるはして泣き乍ら、それを彼に打明けた時の彼の慌て方は一と通りで無かつた。彼の長い間の戀の經歷の中には、こんな事は一再ならずあつたし、たかがこの位の事に驚くほど小膽な彼では決して無い筈だつたが、其時は自分でも不思議に思ふ位意氣地無く悄げて、すつかり途方に暮れたのであつた。而して、兎に角、身二つにして、月足らずで生れた子は、N村の農家に預け、雪子を東京へ出してやるまでの苦勞といふものは、一通りや二通りでは無かつた。す

べての事は村の人達にも知れずにはゐなかつた。が、元來、こんな事には寛大な村の風俗ではあり、また今まで大へんに信用の深かつた彼だつたので、別に表立つた問題にする者も無かつた。しかし、何人が咎めなくとも、彼自身がひどく咎めた。斯ういふ自責は今迄の彼には無い事であつた。どんな悪い事でも、女に對してなら平氣でやつて來た様な彼であつたが、今度は然うはいかなかつた。一人の娘を弄んだ、而して子を産ませた——たかがそれ丈の事では無いか？ と彼は自分を勵まして見たが、決してたかがそれ丈の事とは思はせ無いやうなもの、彼の心の中に出來てゐた。産褥の上に青ざめた顔を仰向けて、ちつと彼を見つめた彼女の涙含んだ眼が、その縋るやうな、訴へる様な眼が、彼の魂の底まで刺し貫くやうに思はれたのであつた。可哀さうな事をした、濟まない事をした——と、彼は幾度も心から彼女に詫びた。けれども彼女は別に恨みがましい様子は見せなかつた。それどころか、さうして彼と別れて行かなければならない運命を只管に悲んだ。而して、殆ど顔も見ずに人手に渡してしまつた子供をなつかしがつて、愈々東京へ出て行くといふ時も、是非一自見て行き度いと彼に強請んだ。しかし、彼は逢はせなかつた。彼は、過去は過去としてきれいに葬つて了つて、何も彼も忘れて、全く新しくなつて新しい生活に入るやうにと彼女の爲めに祈つたのであつた。

だが、別れてからも、雪子は彼に手紙を寄越す事を止めなかつた。その繁々と送つて来る桃色の小さい封筒を手にとると、彼はいつも當惑した。「悪い〜と思ひながら矢張書かずに居られません。もう一度此の手紙を書かせて下さいませ。而して一筆でもいゝから御返事を下さいませ。」などと其の手紙には書かれてゐた。それは幼稚と云へば幼稚な、空想的と云へば随分空想的な心持には違ひ無かつたが、その飽迄も純な愛慕の情は、彼の心を動かさずにはゐなかつた。

「——先生、今日はどうしていらしつて。私は今日は久振りで髪を洗ひました。髪だけは昔から人にも賞められる程いゝ髪でしたのに、あれからすつかり少くなつて了ひました。あの子を産んでから今日で丁度百と三日目、先生にお別れしてからももう七十日目になります。——あの子は丈夫で居りませうか？ 小さい赤ん坊を見る毎に、あの子の事を思ひ出します……。」こんな風に書かれて居るのを見ると、彼は可愛いとも可憐しいとも、何とも云へない或る物惱ましい氣持になつた。而して、あの小さい娘の衷に何時の間にか強く眼覺めた、母性の不思議を思ふと共に、いつの間にか自分にも一人の父が完成されてゐる事に氣が附いた。あの京——それが子供の名であつた、雪子は、これから自分が行つて暮らさうとする東京の「京」の字を、その子供の名とするやうに、彼に頼んだのであつた——に對する彼の愛着は、

雪子に對する愛着と並行して一日増しに力強くなつて行つた。彼は、一方、その恥づ可き過失の記憶に苦みながらも、時々、子供の許を尋ねずにはゐられなかつた。而して「因果の種」といふ風にばかり考へて居たその幼い者が、今や、「愛の結晶」として己の腕の中にある事は、はつきりと彼は感じたのであつた。

だが、豫期された運命は案外早くやつて來た。雪子の嫁入が、伯父の手でとりきめられたのであつた。專斷でそれをきめて了つた伯父は、どんなに嘆いても訴へても、彼女の否を通しては呉れなかつた。仕方が無い、何事も運命と諦めて嫁入りする事にしました、その前に是非一度お目にかゝらせて下さい、私のたつた一つの此の最後のお願ひを、どうぞ聞いて下さい、といふ雪子からの手紙を見ると、彼は幾度も躊躇した末に、たうとうこつそりと東京へ出かけて行つた。而して、彼が曾てY市の或る私立學校で教へた事のある舊の生徒で、それが偶然、雪子とも見知越の仲であつた貞子といふのが、丁度、雪子の家の近くに居たのを幸ひ、その貞子の間借をしてゐる部屋で、彼は、村の方で別れてから初めて雪子と逢つたのであつた。雪子は部屋に入つて來て、そこで待つて居た彼を見ると、

「まあ、先生！」と云つたきり、べたりと崩れるやうに坐つて、涙含んだ眼でぢつと彼の顔を打ちまもつた。いかにも懐しかつた、逢ひ度かつたといふやうに——。

貞子が座を外したあとで、雪子は、自分の悲しい結婚の経緯を涙交りに話した。がさつな凡庸な、教養もなく、實力もない何一つ取柄のないやうな安官吏——さういふ者の妻になぞなるのは死ぬより辛いと彼女は言つた。

「だが、さう云つたものでも無いさ。夫婦になつてゐる中には、自然と情愛も出て来るだらうし——」などと、彼はいろ／＼と慰めて見たが、慰めても慰めても、小娘のやうに啜り泣きして泣き止まない雪子は、小刻みに揺れる細い肩や、抑へた袂の端に顰む眉や、そのいちらしい様子を見ると、彼は心臓の上をぢかにびし／＼と鞭打たれるやうな氣がした。——彼女を斯ういふ運命に陥れたのは、皆自分の責任である事が痛切に感じられた。

「困るなあ。そんなに可厭なものなら——」と彼は云ひかけたが、しかし、「どうかして下さい。私はあなたの仰有る通りになりますから。」とでも言ひ出されたらどうしやうか？ 彼は此の娘の生涯を引受ける丈の力がもう自分には残されてゐない事を感じたので、「すつかり、決つて了つたんだから、今更何うも仕ようが無い。ね。兎に角、それほど先方が熱心に望んで居るといふのなら、まあ、行つて御覽。決して悪い事にやならないよ。」と、力の無い慰めの言葉を繰返すより外に仕方が無いのであつた。

でも、さうして泣き度いだけ泣いて了へば、それで彼女の氣は濟んだらしかつた。而して、

愈々 別れようとする時だつた。

「どう？ それでもう身體の方は？」と聴くと、雪子は淋しく笑つて、

「え、もういゝの。ぢや、あの京ちゃんの事を御頼み致します。あの子は丈夫で居りませうか？」と、その時はじめて、彼女は京一の事を云ひ出して、

「伯父でも誰でも、あの子はもう死んだと思つてるのよ。本當にあの子も可哀さうな子ね。」と、又、新しい涙を、あの出産後の大患おほわざらひから、未だ十分に健康を回復しきつてはゐないらしい、その青ざめた頬に流したのであつた。

「あの子は、私が引受けたよ。あの子の事などは——今までの事は、みんなもう全然忘れて了つて、新しい人間になつて、新しい生涯に入らなきやいけないよ。」と、彼が、自分の娘か何かに言ふ様に、優しく云ひふくめると、雪子は素直にこくりをしてゐた。

さうして雪子は嫁入した。彼はほつと安心した様な心持と、何か大切なものを奪はれて了つた様な心持とを同時に感じたが、雪子は嫁入してからも尙ほ手紙を寄越す事を止めないのであつた。「どうぞ先生。いゝえ、先生では無いあのかあいゝ京一のお父様。私がまた斯うして手紙をあげるのをお許し下さいませ。もう御返事を下さいとは申しませんから、唯、私の書き度い時に此の手紙を書かせて下さいませ。」といふやうな調子で書き出されたその手

紙には、何一つ楽しいところの無い、思つたよりも更に不幸なその結婚生活に對する怨みと呪ひとの言葉が繰返された末に、一緒に彼の山の中の學校に居た頃の事が懐かしい思ひ出して繰返され、「世間で何う云はうと、他が何と囃さうと構はない、私は矢張先生のお傍に居らせて頂けば宜かつたと思ひます。」などと書かれてゐた。それを見ると、彼は今更のやうに、自分に總てを捧げて悔いなかつた彼女の、その可憐な戀心が身にしみじみと感ぜられるのであつた。而して、彼の如何なる分別も反省も、その手紙に對して返事を書く事とどめる事が出来なかつた。直接には出せないその返事は、貞子が中繼なかつぎをして呉れたが、その中に、手紙ばかりでは満足出来なくなつた雪子は、是非もう一度お目にかゝらせて下さい、たつた一度だけ——と言つて來た。いけない！ 飛んでもない事だと、彼は強くかぶりを振つて見たが、どうしても打ち克ち難い誘惑がそこにあつた。たつた一度だけ——さう自分に念を押し乍ら、彼は、又、そつと東京へ、貞子の家へ出かけて行つた。

「やあ、すつかり立派な奥様になつたね。見違へて了つたよ。」などと、彼がわざと快活に、冗談の様な調子で云ふと、雪子はきまり悪さうに赤くなつたが、その懐しさうに見上げた眼には、もう一ぱいの涙が湛へられてゐた。しかし、彼女は、その手紙でのやうに悲しさうにばかりはして居なかつた。血色なども前よりはすつとよくなつて、人妻らしい落着の中に聊

かは取り澄ました風も見えた。彼は一寸裏切られた様な氣がしながら、強ひて冗談めいた、とりとめのない口の利き方をした。すると彼女は、「先生は、まあ、あんな事ばかり——」とでも言ひ度さうな眼附で——恨めしさうな、時にはまた腹立たしさうな眼附で彼の顔を見て居た。

「折角お目にかゝれて嬉しいと思へば、先生は些ちつともしみぐと話しては下さらないし、私も云ひ度の事が言葉にならないで——。」などと、雪子はその後の手紙に書いて來たが、一度逢ふと、その愛執が愈々斷ち難いものとなつた。彼は、それから又二度も彼女に逢ひに行つた。——いや、唯一寸あの小娘の愛にほだされたばかりだといふ風に、初めの中は強ひても考へて見ようとしたが、今や彼は、その身その心の全部を捧げて戀してゐる自分である事を否いなむ事が出来なかつた。彼は物惱ましい戀ごころに攻められて、一睡ひとねじりもせず夜を明かす事さへあつた。一體今時分になつて、何處からこんな情熱が生れて來たのか？ 彼は自分ながらそれが不思議であつた。彼のこれまでの生涯に關して來た數知れぬ多くの戀の、どの一つに、それほど彼を眞劍にならせたものがあつたか？ 今思へば、それ等は皆、程度の差こそあれ、要するに一つの遊戯に過ぎなかつた。彼がそこで味つて來たのは、戀はるゝ者の樂みであつて、戀ふる心の苦しさは、曾て經驗した事が無いと云つても宜かつた。相手にとつ

ては生命を賭けての戀であつても、彼にとつては唯屑の頭の懶い一つの微笑でしか無いといふ風であつた。が、今度といふ今度、彼は、初めて本當の戀、心からの戀を知つたのであつた。戀の苦みと悶えとを知つたのであつた。これは一體どうした事だ？——彼は、その時候はづれの情熱を持餘しながら、時々自分を顧みてかう呻くやうに呟いて見るのであつた。

ところが、何うしたのか、今までは一月に二三度宛は屹度來た雪子からの手紙が、ばたりと來なくなつた。此方から二三度出した手紙に對しても唯の一度も返事を寄越さなかつた。此方からの手紙は、勿論直接には出す事が出來ないので、いつも貞子の許に送つて、貞子の手を通してそつと渡して貰ふやうにしてゐるのであるが、それも、果して先方の手に届いてゐるのかどうか、貞子からは慥かに渡したと云つて來て居るが、それさへ甚だ覺束なく感じられて來た。

彼はいろ／＼に思ひ惑つた。重い病氣にでもかゝつたのでは無からうか？ それとも、自分との事が夫である人に知れて、何か困難な事が持ちあがつてゐるのでは無からうか？ しかし、そんな事ならば、少なくとも貞子の許までは何とか消息が通じてゐる筈だ。それとも又、彼女の心が急に變つて自分から離れる氣になつたのであらうか？

この最後の疑ひは彼の心を暗くした。だが又直ぐに、それならばそれがいゝ、その方がい

いのだ——

と思ひ返して、強ひて淋しく微笑して見た。

だが、さうは思つても、どうも此のまゝになつて了ふのは堪らない氣がした。それに、あの京一といふ者もある——たとへどんな事にならうとも、自分と彼女との間にあの子供がある以上、さう易々と離れられるものではない。さつぱりと他人になつて了ふにしても今一度逢つて、子供の話でもして、さうしてから氣持よく別れる事にし度い——。

さう思つて、彼は、三輪先生は、今日、東京へ出掛けて來たのであつた。

午少し過ぎに、S停車場に着いた三輪先生は、そこから直ぐにU行の電車に乗つた。而してU廣小路で電車を捨てた。貞子の宿は、そこから七八町ばかり、ごちやく／＼とした裏町の方へはひつた處にあつた。師走の町には忙しげな人通りが續いて、門毎に立てられた松飾の竹の葉には、埃つぽい風がかさこそと薄日の影を搔き亂して、うそ寒い音を立てゝゐた。ふいと、あの山の中から出て來た彼にはあたりの様子が目まぐるしく、漸くその貞子の宿を、とある露地の奥に見出すまでには、幾度も幾度も路をとりちがへた。

日曜日なので、折好く家に居た貞子は、彼の思ひ掛けない訪問に一寸驚いた様子であつた

が、

「まあ、先生。ようこそ！」と例のやうに愛想好く迎へ入れた。

貞子は雪子より七つ八つの年上で、もう三十近くなつてゐたが、未だ獨身で、その仕舞屋の二階に間借して、下町の方にある或る會社にタイピストか何かに通つてゐるのであつた。

彼はその二階に通されると、ほつとしてあぐらをかいた。明るい六疊の間の窓際には小さな机が据ゑられ、その上に、婦人雜誌だの、化粧品びんの瓶だの、硯箱いんげうだのが、亂雑らんざつに置かれてあつた。半間の床の間には、未だあたらしいメリンスの派手な掩おほひをした琴が一面、その下には勸工場かんこうじやうものらしい安手な花瓶に、寒菊かんきくの小さい花が、つゝましまやかな匂におひを放つてゐた。

下から茶の支度をして來た貞子は、血ち肥ぼりに太つた手で茶を汲みながら、

「もう學校の方はお休みになりました？」と、一寸上目をして聞いた。

「あ、昨日から。」

「さ、どうぞお樂がに。ほんとはよくお出かけなさいましたね。」と、貞子は取つてつけたやうに云つた。

「あ。今朝になつてふいと思ひ立つてね。學校の買物で一寸用もあつたし——。」と、彼は坐

り直した洋服の膝を窮屈きうくつさうにしなから、そは／＼と落着かぬ風で、茶を啜すすつたり、煙草せんそうに火をつけたりした。彼は何よりも先づ、雪子の消息を聞き度いのだつたが、何だか妙に言葉が聞へて、氣輕きけいに切り出せないのであつた。貞子は、二人の間の事は萬事すつかり呑み込んで、謂はゞまあ二人の愛の好意ある保護者として、甲斐々々しく種々いさくの面倒を見て呉れるのであつたが、どうかすると、ちらり／＼と、皮肉な眼附を彼に投げかける事があつた。「まあ、先生も可加減かかへんになさいよ。」とでも言ふやうな——。で、彼は、何よりも彼女のさういふ眼附を憚おそつて居た。

だが、今日は、貞子の方でも何となくそは／＼と落着かない様子をして居た。而して、思ひ做ししか、今までとは違つてひどく素氣そけないやうな處が、その素氣無さを表面に表はすまいと意識いしきして努つとめて笑顔を作つたりなどするところが彼の目についた。

間の悪い沈黙しんもくを紛らす爲めの、すこしばかりの無意味な會話の後に、

「あの、雪子さんの方からお便りが御座いました？」と、貞子の方から口を切つた。

「いや、一向無いんでね。」と、彼は、頬ほの熱くなるのを感じながら言つた。

「まあ、些ちとも御座いませんの？」

「あゝ。」と、彼は力無い調子で言つた。「何か變つた事があつたんぢや無いのかな？」

「それが、へんなんで御座いますよ。私の方にも近頃些とも御たよりが無いんで、つい三四日前、あのI町のお宅をお尋ねして見ましたの。すると、もう十日ばかり前にS町の方へ御引越しになつたといふんですよ。而してもうあとの人がそこに越して来てゐましたの。」と、貞子は、ぎこちない調子で問へ問へ斯う云つた。

「引越したんだつて？ で、その移轉先の通知も来ないのかね。」

「え、それが来ないんですの？ 本當に雪子さんもどうしたといふんでせうね。」

「そりや、をかしいね。」と云ひながら、彼はぢつと貞子の顔をみつめる様にした。貞子は、ついと眼を反らす様にした。その刹那、何となく、へんなものが彼の心に感じられた。

「近頃、あれはどんな様子でしたね。——家庭の方は？」

「え、それは別に何うつて事も無いやうでした。さう。私の最近お目にかゝつたのは、つい、二週間ばかり前の事でしたが、大へん御元氣のやうでした。」と云つて、貞子は一寸眼を伏せて、咳くやうに、

「あの方もだん／＼おしあはせにおんななさるやうですよ。」

「ふむ。そりや、結構だ。」

又、重苦しい沈黙が來た。

「で、此間の。」と、彼はしばらくしてから云つた。「あの手紙は届けて貰へたんだらうかね。」  
「え、あれは慥かにお届けしました。」

貞子の云ふ事は、何だか辻褃の合はない事だらけだったが、押し返して聞きたゞすわけにも行かず、彼は取附端も無い氣持で押黙つてゐた。貞子も、何か云ひ度い事があるが、何といつていゝか適當な言葉が探し當らないといふ風であつた。そのばつ、の悪い沈黙がもの、三四分も續いたらうかと思はれる時、階下から此の家の主婦らしい人が上つて來て、上り口から一寸顔を出して、

「岡村さん。あの、お客様——。」と小聲で告げた。

「どなた？」

「井川さんですよ。」

「あ、さう。」と貞子はさつと顔を赤くしてひどく狼狽した様子をした。困つた、どうしたら宜からう？ といふ當惑があり／＼と其の顔に現はれた。

「お客さんかね。ぢや、私は失禮しよう。」と、彼が立上らうとするのを、貞子は、  
「いえ、宜いんですよ。」と慌てゝおしとめて、

「失禮ですが一寸。」と云ひ捨て、主婦のあとについて階下に降りて行つた。

下に降りた貞子は、十分経つても二十分経つてもあがつて來なかつた。彼は、妙に不愉快な、而して苛々とした心持で、無闇に巻煙草を吹かしてゐた。——矢張、さうだつた。雪子はおれから隠れたのだ、離れ去る氣になつたのだ。而して、貞子もそれに賛成したのだ。貞子は何もかも知つてゐて、白ばツくれてゐるのだ、と彼は思つた。而して腹立たしいといふよりも、さびしい、物悲しい氣がした。さう云へば此の前逢つた時、どうも彼女の調子が、へんだつたが、あの時分からもうさういふ氣持になりかけてゐたのかも知れない、などと考へながら、彼は、その時の事を思ひ浮べて見た。それまで逢つた三度は三度乍ら、雪子は何處かにはかんだ様な遠慮した様な風を見せてゐたが、その時は、妙には、しやいで、村に居た時のやうな打解けた調子で甘えかゝつたりした。さうかと思へば又、急にふざぎ込んで涙含んだりした。「だが、こんな事をしてゐていゝのかな。」と彼が云ふと、「構はないわ！」と彼女は云つた。「もし、これが知れると——」と云ふと、彼女は、「知れたつて構はないわ！ 構ふもんですかあんな木偶坊見たいな人！ 先生はそれが怖いのか？」などと、自棄な調子で云つた。かと思ふと、急に彼の膝にもたれかゝるやうにして、「忍ぶ戀路つて云ふのよ！——あなたは。本當にいけない人よ！」などとさゝやき乍ら媚かしい眼で彼の顔を眺め入つたり、その様子に何處か斯う狂氣染みたところがあつた。

「それでも、旦那さんは可愛がつて呉れるだらうね。」  
「えゝ、それは可愛がらない事はないわ。」

「まあ、其うちに子供でも出來ればね。」と、彼が眼の周圍に皺を寄せて一寸笑つて見せると、雪子は急にヒステリカルな調子になつて、

「子供なんて。私、もう子供なんぞ生まなくてよ。誰が子供なんぞ。」と、腹立たしげに云つた。而して、思ひがけ無くもほろ／＼と涙を流したのであつた。……

彼は、その時雪子の言つた事や爲した事を解き難い謎のやうに心に繰返してゐた。と、階下の格子戸が開く音がして、客が歸るらしい氣配がした。續いて、

「井川さん！」と呼びかける貞子の聲が高く聞えて、慌しい下駄の音がした。彼は、何の氣もなく、一寸首をあげると、丁度窓障子の硝子越に、入口の門の處で、追ひついた貞子が、何かその人に話しかけてゐるのが眼に入つた。此方向きに立つてゐるのを見ると、ハイカラな洋服姿の若い男であつた。而して貞子はその男の胸のところへ廂髪のおしつける様にして、いかにも親しげな様子で話してゐるのであつた。それを見た彼は、先刻の貞子の慌て方と思ひ合せて、その男が普通の訪問客で無かつた事を看て取つた。而して、今日の自分の訪問が、いかに彼等の邪魔となつたかに氣がついた。



「失禮いたしました。」やがて、室に入つて來た貞子は、その赤くなつた顔に微笑を浮べながら、斯う云つた。

「お客様なら、私が歸れば宜かつたのに。とんだお邪魔をしたね。」

「いゝえ。いゝんですよ。」

「いや、決して宜かなかつたらしい。」と、彼は一寸しほの辛い眼附で笑つて見せ乍ら、「本當に大へんお邪魔をしたね。さう云つて呉れゝば宜かつたのに。」

すると貞子は、それで無くてさへ血肥りの赤い顔を一層赤くしたが、俯向いた顔を振りあげると、思ひ切つた様な眞面目な調子で、

「先生、私今度、結婚する事に致しました。」と云つた。

「結婚、ほう、そりや結構だね。」と、彼も思はず眞顔になつて、「もう近くに？」

「えゝ、來年になつたら早々。」

「そりやいゝ。いや、そりや目出度ゝ。」

「いえ、決して結構だの目出度いのと云ふんぢや無いのですけど——。兄達や友達などにも勧められるものですから。」と、貞子は顔は赤くしながらも、如何にも職業婦人らしい冷靜な、散文的な調子で云つた。

「いや、そりや何よりだ。女は矢張、結婚せにやいかん！」

彼は斯う太い沈んだ聲で云つたが、急に居住ひを直して、煙草の袋をポケットにねぢ込んで、

「ぢや、私はおいとましよう！」

「ま、もうお歸りになりますの？」

「大へん失敬したね。ぢや、もしひよつとして、あれに逢つたらね。宜しく——と然う云つて下さい。あんたにも色々お世話になつたがね、——いづれ又。」さう云つて彼は思ひ切りよく立ちあがつた。

「さうですか、まあ。——ぢやあの雪子さんの御住所は分り次第お知らせ致しますから。」と、貞子はどぎまぎとしながら云つた。

「いや、あれにももう逢ふまいよ。實は、もう一度逢つておき度いと思つたんだがね。矢張逢はない方が宜ささうだ。——その方がいゝ。元來、道で無い事なんだからね。」と、彼は淋しく笑つた。而して、逃げ出すやうに階段を降りた。而して、何か連りにわび言めいた事を云つてゐる貞子の言葉を上の空に聞きながしてそこを辭した。

通りへ出て五六町歩いて、漸く昂奮が鎮まつて來ると、彼は先づ苦笑の唇の上るのを感じた。彼は、今日の自分が、貞子の眼にどんなに、へまな人間に映つたかを思った。逃げた女のあとを追蒐けて、人の戀の邪魔をして——しかも、いゝ年齢をして、と思ふと、彼は自分で自分を嘲らすにはゐられなかつた。本當に、おれは一體何といふ馬鹿げた眞似をしたものだ？ あの女はどうせ何時までも自分の手に止まつてゐる女ぢやない。それは判り切つた事ではないか。いや、自分としては、此方から勸めて然うさせなければならぬ筈だつたのだ。彼女は要するに聰明に身を處したのだ——。

彼は、そんな事を考へ乍ら、ぼんやりとその停留所に佇んでゐた。彼の眼の前を、幾臺もの電車が通り過ぎたが、彼は別にそれに乗らうともしなかつた。

だが——と、思ひ切つて電車に乗らうとした時、又、別の氣持が彼の心の中に動いて來た。どうせ別れなければならぬのは、それは判つてゐる。だが、此のまゝ別れて了ふのは餘り呆氣無さ過ぎる。せめてもう一度逢つて置き度い。彼女にしたつてさうだ。黙つて離れ去つて了ふといふ法は無い。殊に、あの京一といふ者もある仲だ……。然う思ふと彼はひどく腹立たしい氣がして來た。而してあの我儘な、世間知らずの小娘が、許し難いものに思へて來た。同時に、彼女の明るくうるんだ美しい眼や、蒼白めた頬や、いつもローズの匂ひを

漲らしてゐたあの房々とした黒髪やがその感覺に蘇つて來て、物惱ましい愛着が、ひし／＼と身に迫つて來るのであつた。

兎に角、もう一度逢はなければならぬ、もう一度逢はなければ——苛立たしく斯う繰返した彼は、線路を横切つて行つて、向側に止まつてゐるM行の電車に飛び乗つた。

I町三丁目五十六番地——雪子がその夫と住んで居た筈の住所を探し當てる爲めに、彼は、一時間以上もその入り組んだ町筋の中をうろつき廻らなければならなかつた。而して、果物屋だの理髪店だのがごみ／＼と並んでゐる狭い通りから導かれたある袋町の奥に、漸くその小さな二階建の家を見つけ出す事が出來たが、見ると標札が變つて居た。引越したといふ貞子の言葉は矢張うそでは無かつたと思ひながら、彼はがっかりして歩みを返さうとしたが、ふと、思ひ直して、その格子戸の前に立つて、

「御免下さい。些と物をお尋ねしますが——。」と云つた。

年増のお上さんが出て來た。彼は、恭しい調子で、先住者の移轉先を尋ねて見た。

「あ、野崎さんで御座いますか。野崎さんはU區の方へおこしになりました。」

「番地が判りませうか？」彼は、迎も判るまいと思ひながらも、斯う訊いて見た。すると、その上さんは、

「え」と。U區のF町の、番地は三番地ですが、さあ何號と云ひましたか知ら。四十六號か四十八號か、何でもその邊だと覚えて居りますが——。」と、案外にもこれ丈の事を答へて呉れた。

「やあ、どうも有難う！」と、彼は心から感謝した。而して急ぎ足で電車通りの方へ出た。人や車の慌しい往來の上を相變らず埃風が吹いて、物の響などの何となく物かなしげな夕暮の町には、もうちら／＼と灯が點りはじめて居た。

再び電車に乗つた彼は、それから一時間ばかりの後には、そのU區のF町の、枸穀垣などの續いたひつそりした通りを歩いてゐた。三番地四十八號——さう口の中に繰返して、注意深く左右の軒燈の文字に眼を配りながら、彼は熱心に探し歩いた。が、横町から横町へといふ風に、通りがひどく錯雜してゐる上、號數が飛び／＼になつてゐるので、なか／＼判らなかつた。

が、たうとう探しあてた。

「四十八號なら、それ、そこですよ。」と、通行の人に教へられた時、彼は却てどきりとした。而して、足音を偷むやうにして、そつとその軒先に忍び寄つて見たが、どうした事だ？ 軒燈の文字を見ると、彼の尋ねるのとはまるきり違つて居た。

四十六號かも知れないと思つて、その方を探して見たが、漸く探しあて、見ると、矢張違つてゐた。彼は、狐につまゝれたやうな氣がして、ぼんやりとそこに突立つて了つた。

四十八號といふのは、聞き違へで、或は八十四號だつたかも知れない？ 今度はさう思つて探して見たが、そこにも矢張訪ねる家は無いのであつた。

「野崎？ はてね。」立ちどまつて尋ねるとその煙草屋の亭主は、しきりに首を捻つた。

「何時頃越して來た人ですかね。」

「十日ばかり前だといふんですが。」と彼は疲れ切つた様な調子で云つた。

「近頃越して來た人は、此の近邊には無いやうですがね。野崎？ をかしいな。」

「は、あ。」と、彼は喪心したやうに、そこに突立つて了つたが、

「や、どうも有難う。」とひよいと頭を下げて、又あても無く歩き出した。

濃い闇の中には、寒い夜風が吹き荒れてゐた。が、家々の窓の締め切つた戸の隙からは、明るい灯と一緒に、楽しげな笑ひ聲などが漏れて、そこに暖かな家庭のある事を思はせた。若い夫婦が一つの灯をまもつて、靜かに夜を過す様などが想像された。

歸らう——と、彼は、その横町の角に出た時、立止まつて斯う呟いた。埃風に吹かれて、半日こつこつとろつき廻つたので、彼はもう精も根も盡き果てゝゐた。而して、すべてか

ら捨て去られた様な自分のみじめな姿が、あり／＼と自分の眼に見えるやうな気がした。力の無い苦笑が、又彼の唇に上つて來た。

お前は、何といふ馬鹿な眞似をするものだ？ そんなに夢中になつて探し廻つて、よろしくまく探しあてたところで、では何と云つて彼女を訪ねるのだ？ 訪ねて行つたところでどうなるものでも無いではないか。——急に、おこりの落ちたやうに冷靜な心持にかへつた彼は、つい今のさきまでの夢中を自分で嘲りながら、重い靴を引き摺つて、もと來た道の方へと力なく歩いた。

Sの停車場へ辿り着いた時は、もう八時半を過ぎて居た。八時二十何分かに、乗り遅れた彼は、此次の十時近くの終列車まで待たなければならなかつた。

彼は、驛の前の小さなレストランへはひつて、ちびり／＼とウイスキーなどを呑んだ。而して、赤い顔をしてそこを出たが、まだ發車迄には大分間があつた。

「もう、東京に出て來る機會もなか／＼あるまい。いやもう決して出て來まい。」などと考へながら、彼は、流石に名殘惜しい気がして、その邊をぶらり／＼と歩いて見た。ふと、一軒の玩具屋が眼についた。彼はそこへ寄つて二いろ三いろの玩具を買つた。

三輪先生は、九時五十五分發の終列車に乗り込むと、ほつと長い息をついて、疲れ切つた身體をぐつたりとその凭りかゝりによせかけて、ぢつと眼を瞑ぢたのであつた。

朝からの事を考へると、今日の一日が非常に長かつたやうな気がした。今日の一日のうち、一つの生涯を経験したやうな氣さへした。而して、つい先刻まであんなに夢中になつて雪子の家を探してゐたりした自分が、今の自分とは全く違つた、何人か自分では無い別の人でもあつたかのやうに考へられた。それほど、今、彼の心は靜かに落ちついてゐた。雪子に逢へなかつた事は残り惜しいには違ひなかつたが、彼女を責めるやうな氣はもう無かつた。それでよいのだ。彼女は聰明に身を處したのだ。此上、未練らしく追蒐けたりするのは、自分の方が間違つてゐるのだ。——すべてを肯定するやうな穩かな心持が、物悲しいやうな疲労の感じと一つになつて、彼の心に充ちひろがつた。

やがて、汽車が動き出した。彼は、その窓に顔を押しあて、硝子越しに、遠ざかりゆく都會の灯を眺めた。而してその都會の中に姿を消して了つた雪子を思つた。而して、心から斯う祈つたのであつた。

「幸福に暮らすやうに——。」

而して、また眼を閉ぢた。汽車の動搖と、疲労と、而して僅かばかりの酒の酔とで、彼は

うつらうつらとした気分になつた。

そのうつら／＼とした意識の裡に、彼は矢張雪子の姿を思ひ浮べてゐた。だが、その雪子の姿は、今はもう遠い遠いものになつて見えた——。その雪子の姿に續いて、彼の眼には、これまでの生涯に戀して來たいろ／＼の女の顔が、思ひ浮べられた。いろ／＼の年齢の、いろ／＼の境遇の、いろ／＼の階級のそれ等の女が、或日或時のそれ／＼の表情と姿態とを以て、次々と現はれては消え、現はれては消えた。或る女は、猥らな笑ひに笑ひ崩れてゐた。或る女は袖に顔をおしあて、泣いてゐた。或る女は、火のやうに燃える怒りの眼でぢつと彼を睨みつけてゐた——。それ等は併し現はれると直ぐに消えて了つた。唯、その中に一人、二十年前の學生時代に戀したあの先輩の二番娘、あの雪子によく似た娘の顔だけは——その口もろ／＼にきけないやうなおとなしい娘の恨めしさうに涙含んだ顔だけは、何時迄も何時迄も彼の眼の前を去らなかつた。

が、その顔は、丁度重ね寫眞のやうにもう一つの同じやうな顔と一つになつた。と思ふと、それは、いつの間にかまた雪子の顔になつてゐた。彼の三十年の戀愛生活の一番しまひに出て來て、はじめて彼に本當の愛を目ざめさせて呉れた、その優しい娘の雪子の顔になつてゐた。

「左様なら先生！ 私は矢張お別れ致します。私は弱い女でんから——。世の中の約束には勝てませんから——。」その悲しげな雪子の顔は、彼に向つてかう云つてゐるやうに見えた。

あゝ、雪子はもう永久に自分から去つて了つた——と、彼は力ない溜息を一つ吐いた。彼はすべてが失はれた事を感じた。而してあらゆるものが皆、遠ざかり行く祭りの行列のやうに、はるか後うしろの方に過ぎ去つて了つた事を感じた。而して、自分がたつた一人とり残された事を感じた。

彼は自分の前に續く淋しい一とすぢの道を思つた。而してもう一つ深い溜息をついた。すると、其時、彼の眼の前には、あの京一のくるりとしたきれいな圓い眼が浮んだ。つゞいて、あのしみ／＼と兩腕に沁みわたる柔かな重みとあたまと温味との感覚が蘇つて來た。それと共にあの打克ち難い父の意識が、歡びに似たある不思議な感情を伴うて彼の心に蘇つて來た。

すべてのものは失はれて了つた。しかしあの子だけは自分に残されたものだ——と思ふと彼の唇には靜かな微笑が浮んだ。彼はまるいきれいな眼をくる／＼と動かして、小さい口をあいて何かわからない言葉で自分に呼びかけるその幼い者の愛らしい姿を思ひ描いた。而して雪子が最初東京へ出る時に、「どうなる事やら將來さきの事は知れないけれど、私は出来る丈東京でくらすやうに致します。あの子も大きくなつたらどうぞ東京へ寄越して下さい。いゝ

え、屹度いつか一度は、私はあの子に逢つて、而してあの子と一緒に暮らしますよ。」と言つた事などを思ひ出した。

雪子は去つて了つた。けれども、自分にはあの子が残つてゐるのだ——と、彼はその心に繰返し繰返した。

汽車は闇を衝いて走りつゞけた。

彼は、もう考へる事にも疲れて了つた。うつら／＼とした意識は、次第に眠りの方にひき寄せられて了つた。

彼は、その三等車の隅でう／＼と眠つては覺め、眠つては覺めしてゐた。而して、そのとも現ともないぼんやりとした眼の前には、あの子供の清らかな眼が、しきりに微笑みかけてゐるのであつた。

—完了—



大正十年三月十二日印刷  
大正十年三月十七日發行  
大正十年四月廿五日四版

(定價金壹圓拾錢)

◀死の女處▶

著作者

加藤武雄

發行者

東京市牛込區矢來町三番地  
佐藤義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地  
新潮社

電話番町  
八八〇九番  
八九〇九番  
九三六九番

番二四七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川區西江戶川町  
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

七百枚の大作。著者苦心の長篇出づ！

加藤武雄氏著

五月下旬發賣

長篇小説 惱ましき春

四六版五百廿頁  
定價貳圓  
送料拾錢

これは作者の最初の長篇である。作者は此の作に、その若き日の夢と悩みとのすべてを織り込んだ。多感なる一人の若き田舎教師を主人公として、戀を描き死を描き憧憬を描いた。新思想の壓迫を不具病弱の身に苦んで毒を仰いで自殺した若き詩人、その清純な心か似而非惡魔主義者の爲めに弄ばれて竟に狂した美しき處女、只管に生を冀ひつゝ血を吐いて死んだ師範の教師、それ等幾多の人物を配して、戀と希望との間に彷徨する主人公の煩悶を描き、主人公が志を抱いて東京に出で、新文學新思想の發生當時の混沌たる中央文壇に身を投ずるの徑路を描いた。一篇の戀物語なる此の作は、我が思想界の或る一時代を紀念して意味深かる可く、而して作者その人にとつては、これ實に青春の挽歌であり、見果てぬ夢の懷がしくも哀しき思ひ出でなければならぬ。

若き文學志望者にと興味特に深き物語也

加藤武雄氏著 『處女の死』の姉妹篇——同型同装の美本

夢見る日

第七版  
四六版二百七十頁  
定價壹圓拾錢  
郵送料六錢

本集は、抒情詩的小説小品十五篇を収めたり。『愛犬物語』は愛犬の追憶に託して若き夫婦の虐げられたる愛を描き、『過ぎ行く日』は春宵の窓に戀を語る美しき青年を描き、『嫁』は未だ見ぬ嫁を尋ねて幻影に生くる老婆を描き、『萬年筆』は山家の一少年の憧憬と幻滅とを描き、『接吻』は一少女の記憶の裡にその哀しき戀を偲ばせ、『夜霧』は夢の如き田園の夜に放恣なる戀のシインを點じ、『知らぬ世界』は初めて永遠に眼醒めたる少年の心の戦きを、『はげあたま』は若き人妻の悲しきあきらめを、『生別死別』は終生相想うて相逢ふを得ざる母と娘との流轉の運命を、『日曜日の小事件』は一少婢のはかなき望みを、『上總の娘』は漸く哀れを知る頃の一少年の心的徑路を野育ちの一少女のそれを對照して描く。

加藤武雄氏著 (第三版)

# 郷愁 (第一創作集)

大版箱入特製  
定價一圓五十錢  
郵送料拾貳錢

鳴母となる日咽  
郷愁の發  
出の道  
後しき者  
寂しき道  
關入者  
土を離れて  
土を離れて  
小なき謀叛人  
土の匂ひ  
手  
みじめな戀の話

本書は、作者の第一小説集で、上掲十二篇を収めてゐる。「夢見る日」の一卷を読まれた人は既に此の作者の作風の如何なる者かを知られた事と思ふ。題して「郷愁」といふ、郷愁は土を離れたる地方人の郷土に對する憧憬たると共に、惱める人間性の其の靈魂の本土に對する無限の渴望を象徴したものである。各篇いづれも眞摯なる作者が精苦の餘になるもの、或は田園の生活を描いて溢るゝばかりの詩趣を漲らし、或は遣る方なき人生の悲愁を叙して清らかなる涙を湛ふ。眞にこれ眞人の眞藝術、魂の底より湧出せる魂の藝術である。

## 大正の文藝を永久に傳ふる二大選集

島崎藤村・有島武郎・片上伸・長谷川天溪四氏選

### 現代小説選集

島崎藤村 有島武郎 片上伸 長谷川天溪  
 谷崎潤一郎 上田松生 加能作次郎 小川未明  
 里見洋次 相馬泰三 芥川龍之介 宇野浩二  
 中村星湖 水上瀧太郎 吉田紘二郎 久米正雄  
 藤村 白鳥 菊池寛 久保田五郎 葛西善藏  
 正宗 白鳥 菊池 久保田 葛西

田山花袋、徳田秋聲兩氏  
 誕辰五十年祝賀記念出版  
 ▼最上製美本八百三十頁  
 ▼參圓八拾錢送料拾八錢

室生犀星 白石實三  
 中川吉二 佐藤春夫  
 加藤武雄 有島武郎  
 細田民樹 忽ち  
 田中純江 十版

### 現代詩人選集

生田春月 木下大太郎 萩原朔太郎 正富洋風  
 河井荃三 兒玉花外 竹友藻風 三木露風  
 川柳春虹 西條八十 茅野蕭々 室生犀星  
 加藤介 佐藤惣之助 野口米次郎 福田正夫  
 蒲原白秋 山宮省吾 野口雨情 堀口大樹  
 北原白秋 白鳥省吾 野口雨情 堀口大樹

島崎藤村氏誕辰五十年祝  
 賀記念出版詩話會編纂  
 ▼最上製美本三百五十頁  
 ▼貳圓五拾錢送料拾貳錢

與謝野晶子  
 與謝野晶子  
 横瀬夜雨  
 新刊  
 出來

### 現代三名作家詩傑選

生田春月 木下大太郎 萩原朔太郎 正富洋風  
 河井荃三 兒玉花外 竹友藻風 三木露風  
 川柳春虹 西條八十 茅野蕭々 室生犀星  
 加藤介 佐藤惣之助 野口米次郎 福田正夫  
 蒲原白秋 山宮省吾 野口雨情 堀口大樹



# 新進作家叢書

一冊五拾錢、送料六錢づゝ

第一■新らしき家	武者小路實篤	十三■愛と憎み	江馬 修
第二■恐ろしき結婚	里見 淳	十四■土の靈	野村 愛正
第三■生あらば	豊島與志雄	十五■無名作家の日記	菊池 寛
第四■大津順吉	志賀直哉	十六■お絹とその兄弟	佐藤 春夫
第五■生と死の愛	谷崎 精二	十七■赤い矢帆	江口 渙
第六■結婚の前	長與善郎	十八■イボ夕の蟲	中戸川吉二
第七■暴君へ	有島生馬	十九■不能者	葛西善藏
第八■煙草と悪魔	芥川龍之介	二十■霞の音	加能作次郎
第九■夢と六月	相馬泰三	廿一■歸れる父	水守龜之助
第十■手品師	久米正雄	廿二■修道院の秋	南部修太郎
第十一■一つの芽生	中條百合子	廿三■結婚者の手記	室生犀星
第十二■神經病時代	廣津和郎	廿四■放浪者富藏	宮地嘉六
		廿五■死を恃む女	細田源吉
		廿六■涯なき路	岡田三郎
		廿七■高い山から	宇野浩二

